鳴になって

江戸川

被爆者の証言 第2集

やけあとで

広島市比治山小学校六年
水川　スミエ

目の見えなくなった母親が
死んでいる子供をだいて
見えない目に
一ぱい涙をためて泣いていた
おさないころ
母に手をひかれてみたこの光景が
あの時のおそろしさとともに
頭からはなれない

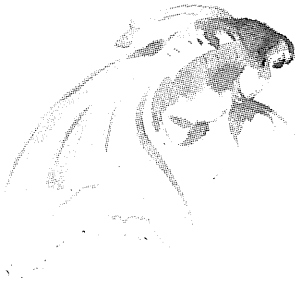
峠三吉・山代巴編、詩集「原子雲の下より」（一九五一年）

もくじ

■詩　やけあとで　水川スミエ　1
■序　基本懇答申と平和運動　浄園　満成　4

■被爆者の証言
わが幼な子と犠牲者のために　田部　光子（広島）　6
奇跡の生存と娘の縁談　山内登久子（広島）　9
そのとき兵器工場で　平山　丈夫（長崎）　12
核の時代に生きる宿命を背負って　林　浩（広島）　14
手作りの白い服を着せて　野村　綾美（広島）　17
「あ、ラッカサンが落ちてくる」　深江　孝（長崎）　19
燃える広島・忘れえぬ少年　高木　留男（広島）　22
「野戦病院」の看護兵として　伊藤　正吉（広島）　25
「新型爆弾」の落ちた日　宮田　吉朗（長崎）　26
真赤な雲の山　宮内　良雄（広島）　32
光の出口に―生と死の境い　高橋平吉郎（広島）　33
波うち、揺れる山　渡辺　和子（長崎）　35
苦しみ生き続ける被爆者　梅沢　武次（広島）　38

■追悼
平和の灯とならん―亡夫相川弘のこと―　相川　絹子　41



臼井さん父子の生き方　銀林美恵子　43
■被爆二世
水をいっぱい碑にかけて　堤　英樹　46
■第三回追悼式より
戦争をするのも、原爆を作ったのも人間　加藤　貴郎　48
★平和教育と追悼碑　市川　広義　48
高校生の誓い　谷地田道子　49
★ＥＰ研と追悼式　菊池　宏義　51
追悼式に参加して　橋本代志子　52
■回想
父の姿を通してみた親江会の活動　杉原　敬三　54
「平和の鐘」連絡帳より8・14・18　公立公園の追悼碑11　反核・軍縮は今私たちの生き方31
「追悼碑の会」の名前について37　16ミリ映画リスト47　「追悼碑」のおそうじ53
被爆者健康の概要56・57　主な被爆者団体紹介55　第四回原爆犠牲者追悼式次第58
二枚の未公開写真59　被爆者はいま59　原爆瓦と平和の鐘60
■執筆者紹介（被爆者関係）　61
■あとがき　62

表紙／丸木位里・俊　表紙題字／川平永介　とびら絵／遠山元子　もくじカット／持田郁子
本文カット／佐藤祝子・遠山元子　追悼碑写真／ヨシノフォート・岡田弘隆

基本懇答申と平和運動

浄園満成

被爆の当日、たまたま所用のため現地を遠く離れて行った人。同様に当日、たまたま所用があって現地に入った人。生死と吉凶。禍福はまこと偶然であり紙一重の差によって決定づけられもする無常の人生である。

こうした流転の中に物皆移り行くが、あの日あの時の阿鼻叫喚の地獄絵は、生涯変わることのない映像として吾々の眼底に焼き付いたまま三十九年間を過ごしてきた。

二度と再びあのような惨烈な姿を出現させてはならぬ。再び被爆者を作るなということが私達の合言葉である。この固い誓いの言葉の中に平和の本質が凝縮されているからだ。

私達のあらゆる行動はこの一点に絞られてくる。被爆者援護法の制定要求も勿論こうした願いからの所産である。

昭和五十三年三月三十日、最高裁は、その判決文の中に（最高裁小法廷民集第三十二巻二号四三五頁参照）「……かかる障害が逆のぼれば戦争という国の行為によってもたらされるものであり、しかも、被爆者の多くが、今日なお生活上一般の戦争被害者よりも不安定な状態におかれているという事実を見逃すことは出来ない。原爆医療法は、このような特殊の戦争被害について、戦争遂行主体であった国が、自らの責任により、その救済をはかるという一面をも有するものであろう。その点では、実質的に国家補償的配慮が制度の根底にあることは、これを否定することができないのである。…」

とのべられている。

被爆者への国家的補償を配慮した文面は、基本懇答申にもみられるが、一般の戦争被害とは一線を画した「特別の犠牲」であることを認めながらも、戦争による国民の犠牲は…「すべての国民がひとしく受忍しなければならない…」とする答申の中核ともなっている思想は、被爆者として納得できないものであり、他の民主々義諸国では見られない考え方であると同時に、四十三都道府県知事を含む八百万余の人々の制定実現への悲願に真向から立ち塞がってこれを冷たく踏みにじったものと言うべきである。踏まれた草の根は強く育っていく。

私たちは、平和憲法の精神に基づき「再び被爆者をつくってはならぬ」と誓った同志の団結をますます固くして、援護法制定実現を含め、真の平和建設を目ざすあらゆる分野での活動を根強く推進することが、今次大戦で散華して行った多くの同胞への何よりの供養だと信ずるものである。反核の新しい芽吹きとして市民による平和研究所の構想の推進などは、ますます強くなる草の根運動を象徴するものとして今後の活動に期待したいものである。

（江戸川原爆犠牲者追悼碑の会代表幹事・親江会会長）

わが幼な子と犠牲者のために

田部光子（広島）

呉で空襲、広島で原爆

この前の戦争の時、私は二か所で、大きな空襲を受け罹災しました。昭和二十年七月二日の呉と、八月六日の広島です。

呉工廠に勤めていた夫は、召集で外地に行かされており、上二人の娘は学童疎開で田舎に行ってましたので、私と下三人の子供が災害を受けました。七才の息子と五才・二才の娘です。いずれも当時の数え年で、夫の応召後生まれた末娘はお誕生をすぎたばかりの赤ん坊でした。

七月二日夜の呉大空襲では、三百機余りの敵機がきて焼夷弾が無数に落とされ、火の海になりました。私達は山の方へ避難していたのですが、夜明けに帰ってみると家も家財道具も一切焼けていたのです。広島市金矢町に姑と義妹が住んでいましたので、それをたよって七月六日呉をはなれました。広島に嫁いできた頃、その姑や妹と五年間同居して、嫁としての苦労を重ねた家なので、私には気の重い広島行きでしたがやむを得ません。全く着のみ着のままの母子四人が、やっと広島へたどりついたのですが、姑さんには冷たくあしらわれ、その近所に住む叔母の家に寄宿することになりました。

そして一ケ月後、八月六日八時十五分。その時私は下の娘を抱いて玄関に立っており、息子も私の右側にいました。突然、大きな音がして建物がくずれ、その中にうまって動けなくなりました。あたりはまっ暗やみ、奥の方から「なむあみだぶつ、なむあみだぶつ」という叔母さんの声が聞こえます。しばらくして明るくなってみると、一間位の大きな壁が私にはりついたようになっていて動けないのがわかりました。その時、私は、「八百屋お七」のように生きながら火あぶりで死ぬと思いました。そこへ十八才になる義妹がズロース一枚のはだかで、道路を歩いてきました。この妹は駅前の郵便局に出勤途中、後ろからピカの光を受けたのです。着衣に火がつき、通りがかりの人様にもみ消してもらったといいます。

やけどで痛々しい妹に手伝ってもらってようやくはい出すことができました。下の娘は抱いたままでしたが、側に立っていた息子は離れた道路までとばされていました。五才の娘は二階で寝ていたのですが、こわれた窓から血だらけの顔を出し「お母ちゃん。お母ちゃん」と泣いていました。私は無我夢中でかけ上がり、娘せい子を連れ出しました。

それから姑の家に行くと、顔がやけた母は「もうこのままで良い。動きとうない」と、放心したように、階段に座って動こうとしません。嫁の私がいて姑を見殺しにできないと一生懸命説得、火がせまってくるので、それぞれ警察の方達に誘導されて逃げたのですが、皆ばらばらになってしまいました。私の手元には二才の末娘がいるだけです。私は東練兵場の上、天神山に逃げました。私はやけどこそしていませんが、顔手足に無数の怪我、中でもひじと足にはぽっかりさけたような大きな傷を負っていました。

一時の難を天神山にのがれた後、十日間、息子、娘、姑、妹を探して広島のあちこちを歩きまわりました。やっと矢賀の小学校校舎にねかされていた姑と妹に再会、妹の友人の家に助けられていた子供も見つけ出せました。

拾い集めた残り木で

三人の子供と私はやけ跡で乞食のような生活をはじめました。やぶれトタンで囲っただけの小屋、電気も水道もない所で、拾ってきた鉄カブトをおなべがわりにして、食物を煮炊きしました。鼻から口にかけて裂傷（きず）のあった二才のふみ子は、物を食べたり泣いたりすると切口がさけるので、痛がって「あーちゃん、あーちゃん」とかぼそい声で苦痛を訴えておりましたが、十月三日、消え入るように死んでしまいました。母である私と、幼い兄姉で、幸い薄かったふみ子を火葬にしました。

五才の姉せい子はたいへん利発な子でしたが、「呉にかえろうよ。電気もつくし、便所にも行けるもの」と言い「ふみ子ちゃんのように死にとうない」と言い続けていましたが、十月十八日やはり全身衰弱、血便を出して死んでしまいました。この子も私が拾

い集めた残り木で、私自身が火を燃して焼きました。お棺は形ばかりの箱で、足がみえる、顔がみえる、娘の体を自分でもやしたときの苦しみ悲しみは言葉につくせません。

その後、七才の息子も髪の毛がぬけ、足が立たず、血便も出るようになり、下から順番に死んでいくのかと私は不安でたまりませんでした。やっと探しあてたお医者さんに、「あまりにも気の毒だから」と普通では手に入らない貴重な薬を注射していただいた時の嬉しさ、そして息子は、何とか生きのびることができました。

その後、疎開から帰ってきた娘二人と、幸い元気で復員してきた夫と、家族で力を合わせて、生活してきました。

しかし、その間私は、丹毒、腹膜炎、腎臓結核、膀胱炎と、十年間寝たりおきたり、三十八度の熱が百日以上も続き、畳が三枚もくさるほど病気の連続でした。何度死にたいと思ったかしれません。死んだ娘達の所へ行きたいと思いました。「死ねた人は幸せだ。私は業が深いから死ねないのか。私ばかりなぜこんな目に合うのだろう。」と人をねたみ、世をうらみました。

ここまで、生きながらえたのが不思議なくらいです。今、静かに余生をおくりながら、この碑の中に眠るふみ子、せい子、そして多くの犠牲者の御冥福をお祈りしています。これが私の生涯の一ページです。御静聴ありがとうございました。

（第三回江戸川原爆犠牲者追悼式にて。'83・7・24）

一九八三・九・五

滝野公園のすぐ近くに住んでいながら、つい最近この追悼碑に気づきました。新鮮なおどろきでした。同じ日本の出来事として、同じ日本人でありながら、原爆のことをそれほど深く知っているわけではありません。一瞬のせん光の後にすべてを失ってしまう恐怖は、ちょっと自分の感覚では、想像もできません。この原爆追悼碑が散歩道にあるのは、自分の生活の中での接点として、ごく普通に広島に思いを寄せたい。一度ぜひ広島に行ってみたいです。

「平和の鐘」連絡帳より①

奇跡の生存と娘の縁談

山内　登久子　（広島）

昭和二十年当時、私の家族は、夫と妊娠五か月の私と二人の幼い子供の四人で、広島市段原に住んでおりました。八月六日、たまたま主人は岡山出張中でしたが、仕事を終えて、一週間ばかり田舎にあずけていた五歳の娘を連れて、広島に帰ってくる車中で広島が爆撃されたことを知りました。この二人は直接被爆ではなく、二次放射能を受けたわけですが、家にいた息子と私、それから胎内被爆の娘を含め、わが家では五人が被爆者ということになります。昨年主人が「ガン」で亡くなるまでは、みな比較的元気でしたし、被爆時もやけどやけがをしなかったという運のよい方ですので、被爆体験を話すのもはばかられるのですが、私ども一家のこれまでのことをまとめます。

六日の朝、原爆が落とされたとき、私と二歳の息子は部屋の中におりました。二・六キロの地点です。屋根がとび、太い梁が折れ、二間続きの厚い壁が倒れました。その壁は半分に分かれ、一間は手前に、私どものいた側の一間は向う側に倒れました。あの重い壁の下敷きになっていたら、とても助かっていません。又、遮蔽物があったのでやけども受けず、親子二人無事だったのは奇跡としか言いようがありません。御近所でも、台所のお釜がとんできて大けがをした方がいたり、外にいてひどいやけどをした人もいます。即死された方もいます。又、その頃、各家庭に勤労奉仕の当番が割り当てられ、強制疎開の建物こわしやその片付けに毎日何人かがかり出されていました。ちょうどその日、作業に出た近所の主婦がもどってきて、「奥さん、お水があったら少しください」と壊れた私の家の前に立たれたときの恐しさは、今思い出しても身ぶるいするほどです。冬瓜（とうがん）のくさったような顔に面変わりし、唇は裂け、目はほとんど開かず、聞きとれないほどのか細い声で訴えられました。おそらくこの方も長くは生きられなかったことでしょう。

一方、「広島に新型爆弾が落とされた」といって西条で足止めをくった主人と五歳の娘は、一刻も早

く広島に帰りたいと、列車が動き出すと一番に乗り、広島駅より一つ手前の駅で降ろされて、そこから歩きました。途中、二目と見られないひどいやけどやけがの被災者とすれ違い、広島の町中に入ると、ますます悲惨な地獄図に茫然自失、とても家族が生きているとは思えないと、お骨を拾う覚悟で帰ってきたといいます。

四人が元気で再会できたのは、全く神仏の御加護と喜び合いました。主人の会社はもっと爆心地に近かったので、社員の方達は大きな被害をこうむり、亡くなった方も大勢います。主人はさっそくそのお世話や残務処理で毎日市内をかけずりまわりましたので、たくさんの放射能を浴びたと思います。私はおなかの赤ちゃんにさわるからと、みなさんがかばって、できるだけ大変な状況を見せないようにしてくださいましたので、あまり多くのことは経験しておりません。しかし、電車の中で黒こげになっていた人達のこと、道端で「水！水！」と訴えて苦しがっていた多くの人達のこと、いつも主人が話すのを聞いておりました。「日支事変」の激戦地で戦い、相当ひどい所をくぐりぬけてきた戦地帰りの主人でさえ、もう見ていられない状況だったと言います。

その後の生活ですが、何かというと、これは原爆のせいではないかという想いが、何十年もしてきています。その中で長女の縁談がこわれたときのくやしさ、恐しさは忘れることができません。とんとん拍子でお話が進んでいたのですが、原爆のとき広島にいたことを口にしたとたんに、年まわりが悪いの、相性が悪いのと言ってお断りがきました。そのとき、娘は「もう一生結婚しない」と言いましたが、私は不憫でたまりませんでした。

次に胎内被爆の次女が望まれて結婚するとき、お婿さんになる人が、事情を承知し、「もし障害のある子が生まれたとしても私はかまわない」と理解を示してくれましたが、このときは嬉しくて涙がこぼれました。そしてその子の出産の時はどんなに心配したことか、ほんとにいてもたってもいられませんでした。無事に元気なかわいい孫が生まれ、今は大変幸せです。長男の結婚も無事通過し、もう結婚しないと一人でがんばっていた長女も、三十五歳にな

って良縁に恵まれ、やっと私も心が安まりました。

最後に、主人の死についてふれます。亡くなってから医者より解剖させてほしいと申し出があったのですが、私がいやで断ってしまいました。しかし、いろいろと考え、生前よく多くの世話役もやってきた人だから、世のため人のためになることなら怒らないだろうと思い直して、解剖を承諾しました。その結果わかったことですが、「肺ガン」と「肝臓ガン」で、どちらも他からの転移ということではなく、両方とも並行してガンが発生し、体がおかされていたそうです。ガンにかかりやすい体質になっていたということでしょうか。主人は私を安心させるため「放射能の治療を受けたと思えばよい」などと気楽に言っておりましたが、治療と被爆では根本的に違います。あの広島の焼跡をかけずりまわることがなければ、こんなに早く生涯を閉じることはなかっただろうにと、主人を奪った原爆を私はにくみます。

公立公園の追悼碑

伊藤説翁

追悼碑をどこへ建てるかについては、その時（区に協力要請に行った時）まだ決めてはおりませんでした。手っとり早い場合としては、どこかのお寺かな……位のことでした。二〇九名にわたる江戸川区内在住の被爆者の認識をアピールし、碑建立への協力をお願いし、ボチボチ帰ろうかなという雰囲気の折、「ところで区長さん、この碑を区内のどこかの公園に建てさせてくれませんか？、非政治性、非宗教性、非営利性のためにも、いかがなもんでしょうね？」……「いいでしょう!!」。一瞬、耳を疑いました。ひようたんから駒でした。「区民のみんなが大事にできるものを作ってくださいよ。年をとって広島・長崎まで行かないでも済む、立派なものをお建てなさいな！」逆に激励されて、一同大いに意を強くして帰途についたことでした。人生の機微をつくづく感じたことでした。相縁奇縁の一発勝負でした。

（安楽寺住職）

そのとき兵器工場で

平山丈夫（長崎）

私の郷里は長崎県南高来郡山田村です。昭和二十年春、私は三菱工業学校を卒業して、大橋町にある三菱兵器製作所に就職しました。柳原工場上野組に配属され、会社の近くにあった豆腐屋の二階を同僚三人で借りて、そこから通勤しておりました。十八歳の時です。この工場は魚雷を作っているところでした。

八月九日、長崎市に原爆が落とされたとき、私は職場で作業中でした。ピカ、ドーンという大きな音をきいて、私はその近所にあったガスタンクの爆発だと思いました。バイス台（作業台）の下に、そこにあった道具箱を放り出して、もぐりこみました。万の数の人が働いていた大きな工場で、柱は倒れ、建物は崩壊し、ガラスの破片がとび散ったのですから、その惨状は言葉につくせません。

バイス台の下にかくれた私でさえ百か所以上のガラスの破片がささっていたのです。学徒動員で、私のそばで働いていた女学生の中尾さんは、胴を鉄柱でひかれ、身動きもならず助けを求めておりました。私は彼女に足をつかまれて、何とかしてあげたいと思うのですが、どうしようもありませんでした。痛恨の極みです。

瓦礫の山と化した工場を出るまで百五十メートル位歩くのですが、右も左も、見るも無惨に身体が二つに切れたり、大怪我で血を流して倒れていたり、鉄骨の下敷きになって助けを求めている無数の男や女。耳をおおいたくなるようなうめき声が続き、本当に身の毛のよだつ思いでした。会社の塀のそばには、そこまで逃げのびた人達が折り重なって倒れていました。

外に出てみると、工場のまわりは田んぼだったのですが、そこに首をつっこんで死んでいるやけどの人達が大勢いました。ガスタンクのそばには三頭の馬が仰向けになってたおれていました。これはただごとではない。ガスタンクの爆発なんてものではない、とその時思いました。空の方はうす暗く、地上のあちこちには火の手があがって火の海となり、向

うの方は見えませんでした。
工場の正門から三百メートルぐらいのところにあったお寺まで避難したのですが、そこで気がついたら、私自身も含めて皆はだかでした。やけどの人達は自分の皮膚をぼろのようにぶらさげていました。ここで会社の先輩の鳥巣さんに出会うことができ、道尾に住んでいた鳥巣さんのおばさんのうちで四、五日程休ませてもらいました。下着等をいただいて、それから二十五キロの道を諫早まで歩き、島原鉄道で高来郡山田村に帰りました。この道中は、諫早、島原方面に歩く何百人もの行列だったのですが、途中で半分以上の人達がたおれました。私も家まで帰り着くことができず、村の入口近くに住む叔母のうちの前で力つきてたおれ、ここで一か月以上寝込んでしまいました。
「百こ以上のガラス破片をとり出した」というのは、意識不明だった私を看護してくれた姉の言葉です。その後もチクチク痛み出すと、医者に切開してもらってガラスをとり出すということが一年半位続きました。
その他、私の症状は、被爆後三日目からひどい下痢で苦しめられ、微熱もずっととれませんでした。九月に入って、気味が悪いほどばらばらと髪の毛がぬけ出しました。その頃、あちこちで、あの人も死んだ、この人も死んだという知らせを聞いて、全く生きた心地がしませんでした。髪の毛がきちんと生え、下痢が完全になおるには一年半か二年ぐらいかかりました。
最後に私の父のことにふれますと、長崎へ原爆が落とされた後、父は、息子である私を探して何日も市内を歩きまわりました。多くの死体を見て、また焼く手伝いもしながら、もう息子は生きていないものと思ったそうです。ですから、十日すぎてひょっこりもどってきた私を見てどんなに喜んだか知れません。そして私は生死の境をさまよいながら何とか生きのびることができたのですが、父はその二年後原因不明の病気で二か月療養の末、ぽっくり死亡しました。この父のもう一人の息子（私の兄）は、昭和十九年特攻隊で死んでおります。
今私には息子はおりませんが、四歳になる孫がお

ります。このかわいい坊やを戦争にとられることのないように、もう絶対に戦争を起こしてほしくないと切に願います。

「平和の鐘」連絡帳より②

「一九八四・九・五
　ぼくの親せきの人にも被バク者がいます。あったことはないけど、たぶんつらい体験をしたことだと思います。今日、世界中に反カク、反戦運動がさかんになっています。今ぼくたちが何をしなくては（考えなくては）いけないのか、この追悼碑をみて新たに決心しました。」

「私は、はだしのゲンを見て、何んで人間と人間、同じ仲間どうしがころしあいなんてするのかと、とてもかなしくなりました。わたしたちが、大人になって戦争を反対できるように、今からどれだけ戦争がおそろしいのか、かなしいものかを、心の中に大切にきざんでおきたいと思います。」

核の時代に生きる宿命を背負って

林　浩（広島）

昭和四十年の六月、私は所用があって広島へ出向いた。二十年ぶりでみる広島の街はまぶしいほどみごとに蘇生し、感慨一入であった。平和公園の一隅で、懐しい母校二中の校章の刻まれた碑を見出したときは全身が打ち震えた。そして資料館に足を踏み入れるや二十年の歳月の隔りはまたたく間に飛散し、あの日の生々しい記憶が鮮明によみがえってきた。戦後の慌しい生活に追われて、あの日のことは遠い昔のできごとのように思ってしまっていた。生き残った者のみが味あわなくてはならない負い目にも似た感情がにわかに全身を押しつつむ。その意味では被爆者にとって広島はまた「聖地メッカ」であるのかもしれない。

心に深く期するところがあって、帰京すると早速東友会へ連絡をつけ、東京の被爆者運動のお手伝いをすることを約したのだった。当時江戸川区の小岩に住んでいたので、下迫会長にお会いし小岩地区を

訪ね歩いた。折しも被爆者の運動は再度の昂揚期を迎えようとしていた。援護法への理念がようやく被爆者の心をとらえ、人々は起ち上がり始めていた。同志を語らい街頭に立ち、国会請願に駆けつけ、私自身は運動の中にのめりこむように入っていく。

戦争の末期、突然あの街の上に立ち昇った原子雲の下では、数十万の人々をまきこんだ巨大な悲劇が繰りひろげられた。街に入ってゆく人、街を出てゆく人、それぞれの生活の営みに従って人々はまたそれぞれの運命の岐路を歩んだ。

七時過ぎに宮島線で広島の街を出た私は郊外の宮内村であの瞬間を迎えた。数日前まで三日間市内の土橋の家屋疎開の作業に従事した私たちは、再び三菱機械の疎開工場建設の仕事に立ちもどったのだった。家族を市内に残し、夜空を焦がし焼け落ちる広島の街を見上げながら、まんじりともせず一夜を明かした翌朝、半壊したわが家へ帰りついた。傷を負ったとはいえ一応無事な家族とはめぐりあえた。己斐の町は黒い雨の集中豪雨をうけたと聞かされた。すべてのものが簿黒く汚れていた。

終戦後、その年の暮れに動けなくなった父は年が改まると間もなく亡くなり、一家は母の郷里挙母（ころも）（現豊田市）へ移り住んだ。一家の働き手を失い、加えて病みがちだった私をかかえての母の苦労は大変だった。貧窮のどん底生活だったとはいえ、私自身は新しい時代の息吹きの中で覇気に溢れた中学・高校時代を送った。二十六年早大進学のため上京する。しかし二十七年初夏結核に浸され、愛知県の大府療養所で三か年の療養生活を余儀なくされる。

昭和三十二年医療法が制定されると、母と妹和子はいち早く原爆手帳の申請をする。それが裏目に出たのか、和子は高一の夏原爆の認定患者と診断され入退院を繰り返すようになった。地方紙には「原爆症に苦しむ和子ちゃん」と報ぜられた。その頃長い間逼塞（ひっそく）の憂き目をみてきた原爆被害の実態が、原水爆禁止運動の高まりとともに詳しく報ぜられるようになり、派手なニュースの素材にもなってきていた。

戦後いろいろな仕事をしながら苦労をしてきた母も、その頃できた豊田市の老人ホームの給食婦の仕事に就いて一息ついていた。しかしほどなく和子の

度重なる入院騒ぎで心休まる間もなくなっていた。三十八年頃だったと思うけど一度危篤の報がはいって、私たちは急いで名古屋の国立病院へ行ったことがある。ベッドに横臥する和子はまるで八月六日のあの大火傷をしたような姿だった。いたるところから出血したそうで、そのため全身が黒ずんでかさぶたでおおわれていた。あと何年も生きられないと医師から言われた。薄幸な命運に胸がつまった。それでも若い命は蘇って、昭和四十五年母が退職したのを機会に東京へ呼びよせ、母と和子は江戸川区の小岩に移り住んだ。ようやく軌道にのってきていた親江会に所属し、代々木病院に通って新しい友人たちに恵まれていった。

二年後、雪の舞った日、和子は亡くなった。残された母は、千葉先生に「あなたは広島の証人ですよ」と励まされ、心を新たにして生活の幅を広げていった。区の老人福祉大学へ通って社会学を学び、人形づくりに精を出し、墨絵を手がけ、好きな短歌を数多く詠んだ。国会請願にはほとんど欠かさず参加する。葛飾の鈴木つるさんやいつも曲がった腰で杖をつき元気な広島弁で語る杉原さんはよき伴友であったようだ。友人知己がどんどん増えていった。

五十五年夏、安楽寺さんに来ていただいて送り盆の行事を滞りなくすませると、力尽きるように静かに亡くなった。葬儀のとき驚いたのは駆けつけてくれた知己友人の幅の広さだった。あの細い身体で精一杯生きぬいたと思わせる女の一生だった。

障害をもって生まれた私の長男が通う上平井中学は今年も修学旅行で広島へ出かける。招かれて事前学習として生徒たちに広島のはなしをした。あの日あの街でみんなとちょうど同じ年頃の子らがたくさん大火傷をして死んでいったようすを語りながら、いま「核の時代」と言われるけれど、核とは一体なんだったのだろうか、あの日を境に人類の歴史が大きく変わってしまうような奥深い意味があの時にあったのかと自らに問いかけていた。気がついてみたら私たちは新しい歴史の原点に立たされていた。性格が一変した悲惨な戦争の実態を熱っぽく人々に語らねばならない責任と宿命とを負わされてしまっていた。

手作りの白い服を着せて

野村綾美（広島）

ほんのちょっぴりクリスマスしぐれの後、昭和五十九年の新春を迎えた。近年にない日本晴れで、この分では暖かい冬かと思う間もなく、一月中旬に終戦の年以来と言われる大雪となってしまった。辺りが白一色になってしまうと人通りもなく、何だか自分が田の中へでも一人おかれたような妙な気持ちになってしまい、家の中に閉じ籠ってしまった。

原爆に遭い敗戦となって、はや三十九年になる。被爆して怪我をし亡くなった長男も、無事いるならば四十歳にもなっていることになる。人の世に働き盛りであろうと思うとき、母親として何とも残念でならない。

当時わが家では、主人は四国の高知、護土部隊に勤務しており、私は長女、長男を連れ牛田町の実家に住んでいた。戦火も激しくなり、覚悟はしていたものの原爆の投下などとても計り知ることはできなかった。

八月六日朝、被爆時、長男健太郎は家の中にいたが、窓ガラスの破片で怪我をし、後頭部を二か所怪我してしまった。長女洋子は障子のさんが目の下にささり、私は庭にいたので頭を怪我し血まみれとなってしまった。父が健太郎を、私が洋子をおぶって牛田山に向かって逃げた。

付近には二部隊があり、兵隊さん達のズボンがそれこそバラバラにちぎれ、皮膚は火ぶくれとなり、ひどい人はくるりとむけてぶら下がっている状態だった。水が欲しい、水が欲しいと苦しい息づかいの中で求める姿は、この世の地獄のようなありさまであった。電車に乗っている人などは顔が真黒に焦げて、吊り皮にぶら下がったままの姿で亡くなっていた。何でも黒焦げになった側が光線に強く当たったということであった。

牛田山へ避難したものの親子三人怪我をしており幼い子供を連れての野宿は無理と言われて、知り合いのようやく雨露をしのげるくらいに残った家を借りた。そこから逓信病院へ怪我の治療に通った。街中に死体が重なり合っているので、木片を持って除

けながら歩いた。終戦まで約十日ばかりあったので敵機の襲来は毎日で、それこそ生きた心地はしなかった。食糧も一日に二こぐらいのおにぎりが配給されるだけだった。

健太郎は手当の甲斐もなく八月十四日力つきて亡くなった。たった一枚残った手作りの白い服を着せて、私は子供を抱き、亡くなった人達を焼く町の原っぱへ連れて行き、「お願いします」と言って手を合わせた。そして振り返りまた振り返り、泣きながら、非業の死を遂げた三歳のわが子と別れなければならなかった。

当時は皆気が張っていて、家の中の死者はたんかを借りて運び、火葬にしてもらった。街中に死体を焼く煙、死臭が漂い、大きな火の手の上がった後は異常な風が吹くのか、あおられるような状態となり、よけいに人々の心は荒んでいった。

隣り組の人達も大部分亡くなられ、夜ともなれば集まって皆で手を合わせて供養した。皆、言葉少なくなってしまい、しかしもはや誰もが戦争の終結を望んでいたと思う。当時二十三歳の若い母親だった私には、当時の毎日が背負いかねる運命の日々であった。

戦争は再びあってはならない。地球の東に西に、キナ臭い様相の見え始めた今日、異常気象で世界の各地は旱ばつや洪水で食糧不足となり、人の心もとげとげしくなっている。戦争や原爆の悲惨な姿を次代の人達に十分語り伝え、平和の尊さを教えて、幸せな社会を作っていきたいと思う。

「一九八三・八・二八

心優しい子供さんたちに水をかけていただいたり、鐘をならしておまいりしていただいて、この碑の下に眠る原爆犠牲者たちも喜んでいることと思います。皆さん「戦争はいやだ、反対だ」と書いておられます。

では、反戦のために、わたしたちに何ができるのか？平和の輪をひろげるためにどうしたらよいのか？一緒に考えあいましょう。銀林美恵子」

「平和の鐘」連絡帳より③

「あ、ラッカサンが落ちてくる」

深江　孝（長崎）

ある放送局のインタビューに「国のために今の自衛隊に行ける人」というのがあり、なんと百人中二人の数字が出た。やはり今の若物は戦争はきらいなのだろう。考えてみるに被爆者はだんだんと少なくなっている。四十二、三歳以上の人しか知っている世代はいない。時代の流れで一人また一人と少なくなる。だが被爆者の心の底には、あの無情の思い出が今も残っていて消えることがない。戦争は終わっていないのである。私は中学校二年の時の被爆なので、中学の同窓会は一度もしたことはなく、ただただ淋しいかぎりである。なぜなら全員が原爆で死んだからなのだ。逢いたい人々の思い出だけが心に残っている。

八月の雲一つない好天気の日、朝より警報が発令されて空襲警報になり、九時すぎに解除になった。当時十時までに空襲が解除になった場合学校へ行かねばならなかった。当日もほんとうは登校せねばならないと考えたが休むことにして、海へ行くつもりで水中メガネのハンダ付けをしていた。友達の家で電気ごてで修理していたのだ。隣りの田中君と前のクリーニング店の広幸ちゃん達の遊ぶ声がしていた。

十一時頃、B17かB29か知らないが銀色の美しいボディの飛行機が長崎上空を通ったのだろう、広幸君の「あ、ラッカサンが落ちてくる」という声がした。その時である。「ピカ」とうすいピンク色の光と同時に「ドガン」と雷が自分の上に落ちたような音がした。友達の家の二階にいた私はどこをどうして階下の庭におりたのか、いや飛ばされたのかいまだに不明である。学校をサボったおかげで今生きているのは運の強さであったと、つくづく思うのである。

外へ出て一番先に耳に入ったのは前のおばさんの娘を呼ぶ声だった。「コトエ、コトエ！」と大声で必死で呼んでいた。その娘は後でわかったことだが、当り所が悪くて死んでいた。二十歳位のいい娘だった。私は道へ出て泣き声のする方へ行った。私の家のまん前の田中ドレスメーカーの家には門のところ

に防空壕があったが、その中から声がしている。あの「ラッカサンが落ちてくる」と言っていた田中君と広幸君が、家の壁のコンクリートが落ちて下敷きになっていたのである。私一人でコンクリを一つ一つどけていたが、あまり重いので困っていると、どこから来たのか父が来ていた。今は亡き父だが、まさに地獄に仏である。二人で片付けていると今度は旅館の客が一人来てくれて三人で助け出した。顔中まっ赤、血だらけだが、どこをけがしたかわからない。さっそく五十メートル位の所の今村外科病院へ連れて行ったが、家はメチャクチャだ。その時初めて大きい爆弾が近所に落ちたのだなと思った。原爆とは夢にも思ってなかった。色々と話はあった。「罐詰め爆弾」だとか……そんな小さな罐詰め爆弾でどれ位の物が破壊されるものか？と何とも思っていなかった。何もかもメチャクチャな中でオキシドールや包帯を探し出して顔をふき、自分なりに手当をした。その子達の親はいないので、いっしょに避難場所になっている山の方のお寺に行った。

それから初めて自分の家に帰った。陳列品は粉々に破れ、裏は空が見える位にこわれていた。家族は皆疎開していて父と私と二人暮らしだったので、小さい弟たちがいないのがせめてもの助かりであったようだ。夏だから御飯がつるしてあったはずだが飛ばされてなくなっている。でもやっと探し出してゴミを除き、おにぎりを二つ三つ作り、ゲートルを巻き、皮靴をはき、山へと逃げ出した。

道々いろいろな人と逢った。顔から背中にかけてやけどしている。倒れているが、助けることもできない。それに又、一人二人ではないのである。一番かわいそうなのは、母親の目の前で子どもが家の下敷きになり、焼け死んだという話で、その母親は気が変になり、はだかで大声で何ともわからないひとりごとを言っていた。

次の日、学校へ行ってみるつもりで家と家の間を歩くのだが、両側は燃えている。行く道はない。遠回りしながらたどり着くと、講堂の中はけが人でいっぱい。苦しみのあまりクソをたれている人もいる。家族もだれもいないけが人は、ほとんど通りがかりの人々なのだろう。自分で住所を言える人はいい方

で、ほとんどの人はやけどとけがで口もきけない。薬もない。ただ死を待つのみ。医者はどこへ行ったのだろう。医者もやられていたのだろうか？　長崎駅より先は黒焦げの死体、電車の中では坐ったままの姿で死んでいた。外国人の捕虜も死んでいた。日本の兵隊も、子供もみんな大きくはれあがり、そのくさいことといったら、そのにおいを実際に味わった者しかわからない異臭なのだ。

学校は原爆の落ちた真下より二百五十メートル位の所だと思う。鉄骨の四階建て、地下一階の当時最高の建物だったが、無残にも崩れ落ち、同級生や上級下級生のむごたらしい姿の死体がそこにはあった。それは生地獄そのものだった。生まれて五十三年、このときが最初で、おそらく最後だろう。

遠く大村、諫早からトラックで食糧を運んで来ていた。道行く人に酒や黒砂糖他いろいろなものを無料でくれた。そのうちに郵便局も机一つで金も出せるようになった。しかし、人間はその時は助かった者でも、早い場合は一か月以内に死んで行った。私がもし学校へ行っていたら必ず死んでいたことだろう。三、四日と家は燃えつづけ、やっと「原爆」ということも知った。近所の死体は、マキを持ちより、近所の人達で火葬してやった。また、いろいろの所に横たわる多くの死体は、町内より一日十円で、私も出向いてかたづけをした。

一瞬にして死んだ人はまだしも、永く苦しみつづけ、今も生きるしかばねとなった方々は本当に戦争の犠牲者であり、今なお戦後は終わっていないと痛感する。私は、二度とこのような戦争のない国ができて、平和で住みよい日本になることを祈りつつ、体験の一部を書いた。どうか被爆者の人よ、お互いがんばって自分とたたかってほしい。私も朝晩、同級生及び原爆で死んだ方々への祈りを毎日実行している。第三次世界大戦の起きないことを祈念してペンをおきます。

燃える広島・忘れえぬ少年

高木留男（広島）

一九四五年八月六日、瞬時に焼き殺された者は二十万人と推定されている。

当時、安佐郡深川村の小学校に負傷者の収容に行ったときのことだ。教室に収容された人々はまだしものこと、カンカン照りつける校庭にムシロを一面に敷いて多数の負傷者が横たわっていた光景は筆舌につくせぬものだった。「水をください」「水をくれ」と、あちらこちらで水を求める声がしていた。「どうせない命だ。飲ませてやれ」と軍医の声。私は声もなくその場を去った。

校庭の負傷者の中に一人の少年がいた。その枕辺に歩みよって話しかけた。「君、いくつなの」「十歳です」「お父さんお母さんはどうしたの」「お父さんもお母さんもどうしたかわかりません」……しばらくして、「兵隊さん、今夜は部隊へ帰るんですか」「うん、部隊へ帰って明日また来るからね。しっかりするんだよ」「ハイ」少年の顔はとても淋しそうであった。私は後髪を引かれる思いで、暑い日ざしの中五キロ余りの道を、頭の負傷と背中の打撲の痛みに耐えて部隊へ帰った。兵舎は倒壊しているので裏山に仮小屋を建て、蚊に攻められながらその夜はまんじりともしなかった。

広島の街は赤々と燃えさかっていた。翌朝、点呼も朝食もそこそこに、一人で昨日約束した少年の所へ行った。「兵隊さん、おはよう」という少年の元気な声を期待して行った。しかし、もはや少年は死亡していた。私の心の苦しみは、この日から始まった。あの少年だけではなく、ほとんど死んでいた。せめて昨日のうちに住所や名前を聞いておけばよかった。一日中炎天下のムシロの上でどんなに苦しかっただろうか。「兵隊さん」を心待ちし、父母や兄弟の名を呼びながら、遠く山を隔てて燃えさかる広島の空を仰ぎ、戦争を憎み平和を祈って死んで逝ったことでしょう。

以来年を経るに従って、あの日の少年のために何かしてやらなければと念じ、一この灯籠を流した。その名も「無名少年の霊」。しかしこのようなこと

をしたとてあの日奪われた少年の尊い生命は二度と帰ってこない。思えばあの戦争は何であったのか。そして残されたもの、得られたものは何か。ほんとうに空しいものではなかったか。あの戦争も平和的に解決できたのではなかろうか。以来私はイデオロギーを超越した一人の被爆者として、誰にも恥じない真の平和をめざし、三十七万被爆者とともに、核兵器も戦争もない全世界人類の幸せのために運動を続けている。被爆者援護法案が何回廃案になろうともがんばらなければならない。あの日の少年のためにも。

一九七五年八月。被爆三十周年の年に親江会として「原爆犠牲者慰霊墓参団」を広島に派遣した。総勢十六名の一員として私も参加した。ギッシリつまった日程の中でも、原爆病院の御見舞いは忘れられない。

一九六九年に一度来院したことがある。その時は内科部長石田先生との懇談だったが、この時は各病室をお見舞いできるというのでもう胸がいっぱいだった。被爆同胞として何といってお見舞い申しあげたらよいか。病室へ入ったものの涙が先に出てしかたがなかった。行った人みんなが目頭をおさえながら、三十年間の苦しみを慰めていた。声も涙でとぎれがち、互いに手を握り合って「一日も早く元気になってください」と……それが精いっぱいだった。

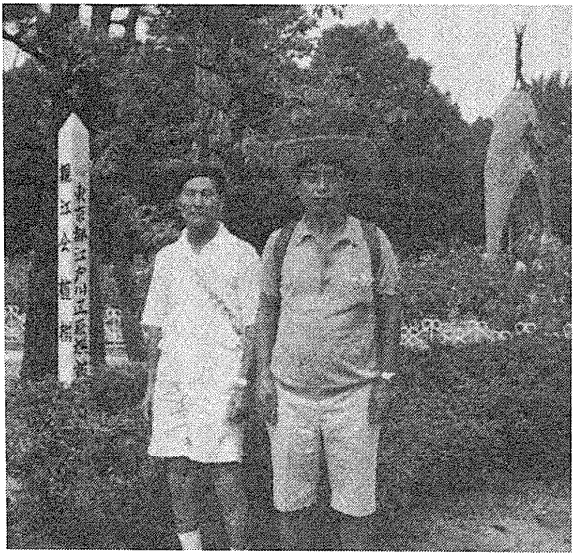
驚いたのは重症者が多いことだ。案内してくれた医師の話では、この病院もベッド数百七十しかなくその上たいへん損傷していて設備が不備であるとのことだった。そこで政府に対して、六億円の予算でベッド数二百五十の近代的設備の整った十分な治療のできる病院を要求している。しかし、残念ながら政府の回答はゼロであったと、憤りをこめて語っていた。やはりそうなのか、被爆者が早く死に絶えることを願っているんだなと、何よりも真先に国の責任においてやらねばならぬ被爆者対策を今日まで放置してきた政府に対して私も大きな憤りを感じた。平常は訪れる人も少ない原爆病院も、八月ともなれば多くの人が見舞いに来てくれるとか。果たしてこれでよいのだろうか。非被爆者の中には「あんた達だけが戦争の被害者ではない。我々だって戦災者だ

から、あんた達のやっていることに協力はできない」。という人もあった。私たちは戦争そのものの被害に対して補償を要求しているのではなく、アメリカが国際法を無視して投下した原爆による放射線、放射能障害等に対して被害報償を要求しているものである。

原爆病院の見舞いを涙の中に終えたあと、原爆養護ホームを訪ねた。私たちも数々の慰問の品々を手渡し、「原爆孤老」――一瞬にして身寄りを亡くされたお年寄り――を励ました。

旅館へ帰り夕食を終え部屋に落着いたものの、この日見聞きしたことを考えるとなかなか寝つけなかった。この人達は三十年間どんなに苦しみ続けてきたことだろう。そしてまた、あの日出会った少年を思い浮かべる。なぜ少年までが殺されなければならなかったのか。あの悲惨な戦争にひきずりこんでいった権力者に対して怒りを叩きつけてやりたい。今また核戦争の危機が迫りつつある。自由主義をはき違えた戦後生まれの若者に、知らないことの恐しさをとくと考えてもらいたい。君たちは自ら愚かな道を歩くのか。真の平和とは何か、いま一度考えてほしい。地球の終わりは近づいていることを知っていただきたい。大きく目覚めよ、若人たち。地球を守れ！　世界を守れ！

（親江会「被爆三十周年慰霊代表団報告書」より）



広島平和公園の親江会記念樹くすのき。
'75年植樹。（左が高木さん）

「野戦病院」の看護兵として

伊藤正吉（広島）

それは一機から投下された小さな爆弾です。昭和二十年八月六日、広島に落とされた原爆です。あの原爆が一瞬にして何万人の命をうばい、傷つけ、広島を灰の海と化しました。それを思うと今さらのように心の中が冷たくなってきます。戦争は絶対にしてはならないと思います。原爆で負傷した者は男女の区別がわからないほど頭髪は焼け果て、裸体部分は大根のくさったようにただれ、その傷からは蛆が発生し、それが耳や鼻に入っていく状態は言葉で言い表わすことができません。

話はあとになりましたが、私たちの隊は野戦病院となり、約二千人の負傷者を収容し、私たち元気な者は看護兵として負傷者の看護に当りました。負傷者は痛みと苦しみで泣き叫びました。火傷で喉がかわき、「水をくれ」とみんな大声で叫び続けるので、軍医が、重傷で助からないような者には水をあげるよう命令が出ました。私たちはその患者に大きなヤカンで水をあげると、息もつかず約一、五～六リットルくらいを飲み、今までの苦しさと叫びを忘れたかのように眠ります。そして数時間後には永久に眠ってしまうのです。ほんとうにはかない命だと心の奥深くから感じました。

朝起きてみると、洗面所付近には、水を飲みに行って途中で力つきて死亡した者が四、五十名いました。名前のわからない死体や、引きとりに来ない死体は倉庫に入れておきましたが、真夏の温度で腐敗し、その悪臭は鼻をついて犬猫同様でした。先に死亡した順から練兵場で焼きましたが、その異様なにおいのためか、寝ている部屋に昼間見た悲惨な光景が入り交って心の中をかけめぐります。これが戦争のために死亡した人間であるかと思うと今でもまぶたが熱くなってきます。

次に私の病気との闘いについてですが、私は昭和四十年から体の調子が悪く、検査の結果「慢性肝炎」と診断され入院。四十三年胃潰瘍で入院、手術。今度は糖尿病。こんなに苦しい思いをして生きていて妻子に苦労をかけるなら早く死んで楽になりたいと

毎日のように死を考えておりました。
だが、被爆者の役員、親江会や東友会の方々、とくに高木さんには精神面から力づけていただきました。又、東友会から郵送されてくるパンフレットを見ると、私よりもっと苦しみ、がんばっている人が多くいることを知り、病気に負けてはいられぬと気をとりもどし今日まで闘ってきました。役員の堤さんに今は大変お世話になっております。生きている限り病気と闘い続けなければなりません。
朝起きて糖尿病の注射をするたびに思うことは、これも原爆のためだということです。しかし自分の体は自分で直さねばなりません。糖尿病は一に食事、二に運動、三に医療とのこと。今では早朝パートに三時間ほど運動かたがた行っております。これはみな、みなさんのおかげとありがたく思っております。みなさんも病気に負けずにがんばってください。
戦争は絶対してはならないとしみじみ思います。今の原爆は広島、長崎に投下したものの何千倍もの強力なものです。戦争は始まって原爆を使用したら全地球上にすべての生物は生存できません。原爆の恐ろしさは実際にあったものでなければわからないと思います。

「新型爆弾」の落ちた日

宮田吉朗（長崎）

茶色の大きな帽子

午前十時頃、空襲警報が鳴り、中学生であった私達は学校へ行けなくなった。空襲警報、警戒警報は毎日のごとく鳴っていたため、次第に危険感も少なくなり、防空壕に入ることもなく、日常生活をつづけることが多かった。その日も傷病軍人として帰宅していた秀雄叔父と庭先で将棋をさしていた。
午前十一時頃、遠くの空で飛行機の爆音が聞こえたが、敵機とも思わず、夢中で将棋をしていた時、突然、隣の屋根がものすごく光り、太陽がいくつも重なって落ちたように白く見えた。一瞬、叔父と私は立ち上がって庭へ出ようとしたが、私達は家の奥へ十メートル近く飛ばされた。自分の力でなく、無

重力の状態で飛ばされ、玄関の壁に打ちつけられた。私達が飛ばされて通ったあと、家具が眼の前で次々に倒れ、飛ばされ、家の中には家具らしきものは全くなくなり、表通りから裏庭までまる見えの状態となった。家は傾き、屋根瓦が落ち、危険を感じるまで多少の時間があったと思う。中庭に作ってあった防空壕に入り、十分も過ぎたと思われるころ、防空壕の上に家が倒れ、火災にでもなれば危いと感じ、叔父と外へ出ることにした。

表通りは、各家の中から吹き飛ばされた家具や屋根瓦で、普通に歩ける状態ではなかったが、だれもが裏山（寺町）の方へ避難している。手足や顔から出血している人もいるし、衣服が破れている人もいる。特に異常に感じたのは、女の子の頭髪がちぢれ、直立し、茶色の大きな帽子をかぶっているようになっていたことだ。

近所から火災らしきようすはなく、何が何だか見当もつかぬまま裏山にある町内の大きな防空壕へ行った。

町内会長が「新型爆弾らしい」と言った。もし新型爆弾であれば七十七年間は草木も生えないという。噂は噂をよび話が次々と変わっていった。しかし今思えば噂の中にも知識の高いものがあったものだと感心する。新型爆弾はマッチ箱ぐらいのもので小さな山の一つぐらいは吹き飛ばしてしまう力を持っているともその時聞いた。

町内の防空壕には次第に人が集まってきた。非常食の乾パンも配布された。時間が経つにつれ恐怖感が薄くなってきたが、だれ一人として自分の家に帰ろうとする人はいなかった。防空壕から外へ出ても、昼間というのに薄暗く、煙の中に時折通る傷ついた人を見るだけである。

防空壕から出て裏山の中腹にある墓地に逃げた。夕食は町内会で配布されたもので間に合ったが、夏の夜とはいえ何もなくて一夜を過ごすこともできず、山を下り、家から夜具一式を持ち出し、墓地に蚊帳（かや）を張り布団を並べて一夜を過ごすことにした。

夜八時頃だったろうか、あたりが暗くなってきた頃、長崎市の中央部にある丘の上から火災が起きた。私の眼に入ったのは、丘の上に並ぶ左手の県庁から

右手の市役所の間約五百メートルぐらいが同時に火になったと思う。それから数時間は火の手が次々と丘の手前側へ広がる。消火する人もないままに、ちょうどお祭りでも見物するかのごとく眺めながら、とうとう一夜を過ごしてしまった。幸いにして火災は中島川で止まり、私の家は火災を逃れることができた。墓地で野宿したことは後にも先にもこの一夜だけであろう。

翌朝、気分も落着き、朝食の準備に下山した叔父が私を呼びに来た。私も急ぎ山の中腹にあった墓地から下山した。傾いた家に入った。家といっても、玄関から中庭、奥の家まで通しで見える状態にあった建物と言った方がわかりやすいだろう。そんな家に父は昨夜遅く帰って一人寝ていたのである。

地獄からの引揚げ列車

父は三菱兵器製作所の機械工場長をしていた。爆弾が落ちてから今まで、父の安否など考えてもみなかった。それは一昨日から出張で不在だったし、昨日来の不思議な世界の中にいないものと思っていたからである。父は昨夜の見たこと、出会ったことを少しずつ話してくれた。

長崎から八十キロぐらい離れた佐世保市の郊外で、工場疎開先を調査している頃に長崎市が被爆したことを知ったらしい。急ぎ長崎へ帰ろうとしたが汽車が思うように走らない。長崎方面から来る上り列車の人はほとんどけがをしており、地獄からの引揚げ列車のようだったという。通常なら二時間もかからない距離なのに、八時間以上もかかってやっと長崎駅の二つ手前の駅、道の尾駅まで帰ってきたのが夜も遅くなってからだ。汽車はそれ以上長崎市内へは行けないので、そこから歩いて帰ってきたらしい。道の尾駅と長崎駅の間にある浦上駅近くが爆心地であるため、父は真夜中にあの爆心地を通って帰ったのである。「道もなければ家もない。夜で周囲が見通せないこともあるが、浦上地区には全く何一つ形というものがない。」と父は語る。私達は墓地から丘の手前側が次々に焼け落ちる光景を、まるで映画を見ているように過ごしたが、その丘の向う側については全然知らなかったのだ。

浦上に親類を探し求めて

浦上地区には親類もあり安否が気遣われた。父や私達はさっそく親類を探すために出かけた。昨夜の火災で焼けた丘を越えると長崎駅前に出る。この付近までは焼け跡が続き、被災者が跡かたづけをしている姿が見られた。長崎駅を過ぎるころから次第に被災跡が変わってきた。直径十メートル以上もある都市ガスタンクがペシャンコにつぶれ、道もなく、建物の跡形もない。三菱製鋼所の鉄骨工場もまるで針金細工を押しつぶしたように破壊されている。電車通りは広かったせいか、やや道であったろうと想像され、ここをわずか数人が歩いている。浦上駅前には馬の死体が転がっていた。前足後足は硬直し、腹部は真黒に焦げ大きくふくらみ、小さな傷口から黒い血が噴水のごとく出ていた。岩川町の電停の近くに電車の鉄の固まりがあった。車輪は大きくはずれ、いくつかの骨が付着している。乗客のものであったろう骨は白く鉄に焼きついている。そのすぐ近くに五、六人の白骨体がある。それは昼食のため食卓を囲んでいたのか放射状に並んでいた。この光景は今も忘れることはできない。死体は瓦礫の間に次から次へと転がっていた。浦上川の中にも無数の死体が散らかっていた。瓦礫の中を歩いているとき足に当って私が転びそうになった死体は、頭、手、足が白骨となり、胸と大腿部には焼焦げた肉が付着し、腹部は黒いボールのようになっていた。何百何千という死体の中にあって、ただただ私達は親類の江頭家の方へ歩いてゆくだけである。建物もなく道の区別もつかない状態の中で、多分このあたりであったろうと想定される場所へ来たが、そこにも四つの白骨体が瓦礫の中にあった。それは叔母なのか従兄弟のものか、又は隣り近所の人なのかわかるはずもなかった。

数時間付近を探した後、通りがかりの人から、少し離れた防空壕に何人か生きた人がいることを聞き、訪ねてみた。江頭の叔父が立っていた。どうして生きていたのか不思議なくらいである。叔母と、五人兄弟の末っ子で一歳になる直美と、全身白い布でつつまれた長兄の嵩君がいた。彼らは皆、家にいなく

て助かったとのこと。叔父は鎮西中学の先生で、コンクリート建物の中にいて無傷である。叔母は城山小学校の先生で、末っ子の直美に学校内で授乳中に被爆、全身にガラスの破片が刺さっていて衣服に血が滲んでいる。全く地獄絵の中に生きるものを見た感じであった。私達は何も手助けすることもできず、ただ江頭の人達の消息を知っただけで引きあげざるを得なかった。

翌日、少しの食糧等を持って、再び江頭の人達がいる防空壕へ行った。途中は昨日と全く変わっていない。このままでは生活もできないので江頭の人達を移すことにしたが、私の家の方は遠く、また道らしい道もなくなっていたため、反対側の川手町へ行くことにした。

夕方、どこで探してきたのか、ゴムタイヤのなくなったリヤカー一台を江頭の叔父が持ってきたので、叔母と一歳の直美を乗せて行った。長兄はその日の朝、息をひきとっていたので残した。彼は私より一つ年上であり、良き従兄であった。リヤカーは死体と瓦礫の上をゴトゴトと引かれ、言葉一つ交わすことのない無言の移動である。浦上川をさかのぼってゆくと、近郊から来た救援団の人達による死骸の片づけ作業が見られた。材木を並べ、その上に死骸を並べる。又その上に材木を並べ、その上に死骸をというように一度に二十体ばかりが積み上げられて一度に焼かれていた。積み上げられた形は、あちこちといくつもあって、それぞれが炎を立てていた。周囲には何一つ物音がしない。処理する人、処理される屍、この世のものとは思われない光景であった。

数日後、江頭の三人を傾いたわが家へ移したが、無傷であった叔父は十日後に死んだ。叔母は原爆の生き証人として、今日も原爆反対に力を入れている。

原爆の恐ろしさは、文章や絵で残そうと思ってもとても難しい。しかし、丸木先生の「原爆の図」という絵を見られた方は少しでも想像できるかもしれない。あの絵の中の人が動いている。小さな、言葉にもならない声で呻いている。そんな世界に自分一人が生き延びたとしたら！　万が一にも生きていたとて地獄というが……だから三たび原爆は使われてはならないのだ。

反核・軍縮は、今
私たちの生き方

菊地宏義

▽一九八〇年の国連の文書「核兵器の包括的研究」によれば、世界の核は四万～五万発。広島型にして約百万発分、TNT火薬で約百三十億トン、人類一人あたり三トン以上に相当すると報告。一九八二年の国連軍縮特別総会や世界の草の根の反核運動など一切無視して、今年一九八四年、ますます高性能の大量の核が生産されつづけている。一月の新聞によれば、アメリカだけで「一日八個の『核』が製造されている」という。想像することが困難な「核狂乱」時代、今、私たちにとって生きるとは、まず「反核」なのである。

▽「核兵器」は人類絶滅する前に私たち人類の「理性・良心・体験と記憶」を破壊・絶滅しようとしている。世界最初の「核戦争」が行なわれ、世界最初の「核戦場」を体験したヒロシマ・ナガサキの心は日本の「国民的体験」「人類的体験」になって、「最初で最後の体験」とすべきことを訴えている。ヒバクシャを前に「病いは気から」と言い、「核保有国の核使用は勝手」と発言する一部政治家を決して許せないのは、人類の「理性・良心・体験と気憶」からなのだ。

▽「一億五千万の人が飢え、最悪の地では五百二十万人もの人々が餓死寸前」と別の国連文書は伝えてくる。「一隻の原子力空母、四〇億ドルは、開発途上国の五十三か国のGNPを上回るものだ！」（ガンジー首相）、「世界の軍事支出の五時間分は、ユニセフの児童保護計画の年予算総額に同じである」（カストロ首相）、もう十分だろう。「核」をつくりふやしている国々がどうして「先進国」なのだろうか。ある人は、「遅れた先進国・進んだ後進国」という。

▽今、若者たちが燃えている。単純明確に「核（戦争も兵器も）はイヤだ」と言う。高校生平和ゼミナールは、広島・長崎・埼玉・東京その他に結成されているが、「平和のために私たちにも何かができる」とアッピールしている。この江戸川でも、葛西南、江戸川、小岩、小松川高校の高校生が、修学旅行で広島を訪れ、戦争体験をしっかり継承し、若者らしく考え始めている。

真赤な雲の山

宮内良雄（広島）

頭上をB29が一機、雲一つない晴れわたった紺碧の空を飛んでいました。八月六日午前八時十三分頃……その時私達は朝の演習をしていたのです。

起床は午前五時頃、演習につぐ演習で身体はクタクタに、でも心はなにがなんでも勝たねばならぬと思っておりました。空襲警報のサイレンがなり、私達は演習をやめ、砲を引いて退避しました。やがてB29が一機飛んできました。日本晴れのブルーの空に銀色の機体がキラキラ光って見えました。まもなく空襲警報解除のサイレンがなり、私達は演習を始めました。その時B29がまた一機飛んできましたが空襲警報のサイレンがなりません。私達は当時馴れっこになっていましたので退避することなく砲の射撃態勢に入りました。

その時、「ピカー」と電光を十も二十も集めたぐらいの光が走り、一瞬何が何だかわからない状態になりました。思わずハッとして頭を上げた時、目の前に真赤な雲の山がボッと浮かびました。そしてあとから雲の柱がのぼり始めました。高く、高く、それはただただ驚きで、あたりは逃げまどう人々で蜂の巣をつついたような状態になりました。やがて巨大な雲の柱はイチゴ色から赤紫色に変わり、高く高く昇りました。そしてあの形容できないほどの悲惨な地獄の状態が展開されていったのでした。たった一発の爆弾で二十万の尊い人命が一瞬の間に奪い去られ、目の前の思い出多い建物が瓦礫と化す、このような悲しい戦争を人類は再び繰り返してはならないと思います。

光の出口に―生と死の境い

高橋　平吉郎　（広島）

あれから約四十年の歳月が流れようとしている。思いは広島に連なって行く。戦局は一段と厳しさを増して、私も召集され、千葉から広島地区鉄道司令部隷下に属し、爆心地から一、四キロメートルの広島市立中広中学校で、わが中隊約六十名が駐屯することとなった。学校の構造は木造二階建てで、一階の六教室が内務班として充当された。

昭和二十年八月六日午前八時十五分、私らは何をしていたか。この日は空襲警報が解除され、続いて警戒警報も解除されていた。校庭で朝の点呼、当日の作業配置が伝達されて解散、それぞれ内務班にもどった。「高橋……」校庭から呼ばれた。「ハイ」と応答して窓辺に急ぎ顔を出した。その瞬間、強烈な異様な光を浴びせられた。この時が魔の八時十五分だったのだ。

私は意識不明で暫時経過した。ふと人の呻き声が耳に入った。助かった、私は意識をとりもどしたのだ。しかし体を動かそうとしてもただ痛みが走るだけ。何がどうなっているかわからない。やがて時間が経つにつれはっきりしてきた。どうも物の下敷になっているらしい。触れる物は木材で、梁や柱や垂木などばかりだ。痛さも忘れて全身の体力をふりしぼって、暗闇の中で手さぐりで障害物の排除に努めた。痛む首がやっとまわるようになった。除去した柱らしい陰から針の穴ほどの光線が射し込んだ。これだ、命の光だ。助かった。一層勇気をわきたたせた。生爪をはがしたりしたが、腕力を使って這い出すほかはなかった。生死の境に匍匐前進でやっとたどり着いた。光の出口に手をかけた。何人かが腕をとって抱え出してくれた。この感激は何にたとえることもできない感激であった。鮮血でぬれた体を戦友がふいてくれた。校庭に立った私は周囲を見わたした。戦友は「よく助かったなあ」「よく生きていたなあ」と肩を抱いて生還を祝福してくれた。うれしかった。大粒の涙がこぼれ落ちた。

この目で見た校庭には、学徒は少数であったが、だれもが歩行できないまでに大火傷を負っていた。

中には生死の境をさまよい歩いている者ばかり。髪の毛は焼け落ち、半袖はボロボロであった。歩ける者は古年兵が引率して、仮収容所で治療を受けるため出発する際、近所から延焼した火勢で倒れた教室など瞬く間に灰燼となった。

天気は薄雲りだった。路傍に一人の男の人が茫然として黒焦げの子どもらしき仏をボンヤリ見守っている。そのうち男はどこへやら行き、間もなく焼けたトタン板を持って来た。仏に触れるとバラバラになることを知り、トタン板ですくい上げて小脇に抱えてどこかへ消えて行った。印象はいまだ脳裏から去らない。

仮収容所は、天満川にかかる天満橋の河岸に設けられていた。辿り着こうとしたとき夕立が急におそってきた。私の目で見た大粒の雨は、黒い雨だった。この雨粒が顔や手に当ると、傷がひどく痛む。ちょうど火傷のような痛さを感じた。収容所では赤チンキと油薬を塗布するだけであった。治療を終わり、天幕張りの仮兵舎に一泊した。そして次の日から転地療養する旨、上司より伝達された。

八月七日、広島駅に向かった。どこに行くかわからないまま命令によって貨車に乗った。翌日、石見大田に到着、直ちに駅付近の大田女子高等学校講堂に収容される手配がついていた。収容所の入口で再び驚いた。先着の患者が満員で、その光景は凄惨そのものであった。顔かたちもわからぬ人、重傷で猛炎の中をくぐってきた人、人相も確かめられない人、「痛い、痛い」と叫ぶ声と水を求める苦痛の声が交錯して、この世の地獄絵図を現出させていた。稲光を見て気の狂う者が多発していた。両隣で寝ている患者は夜明けに他界していた。様々の生と死がここにもあった。

歩ける者は原隊復帰が命ぜられた。数名が貨車に分乗して広島在の原隊に復帰した。このとき上司に「高橋、お前は戦死扱いにされていたのだぞ……」と言われた。

数日後、終戦が報じられた。上司から直ちに除隊するよう下命された。新しい白衣と帽子等が支給され、顔、手、腕等に包帯が巻かれ、顔は目だけギロギロとして、焼土と化した広島を去った。車中で、

「みなさんの受けた傷は、アメリカ国が落とした原子爆弾によるものだ」と初めて聞かされた。
被爆者は原子爆弾、核兵器の廃絶を訴えるものである。終わりに、被爆し戦病死された英霊に対し、謹しんで哀悼の誠を捧げ御冥福を祈る次第です。

波うち、揺れる山

渡辺和子（長崎）

私は長崎市三川町という被爆中心地より三キロ程離れた農業のかたわら石材業を営んでいる家に生まれました。
昭和二十年八月九日のことは生涯忘れることができません。その日は朝から頭が痛くて、ふだん休んだことのない工場をその日に限って休んでしまいました。そのことが結果において命びろいになったのでした。後でわかったのですが、工場にいたほとんどの人が原子爆弾のために死んでしまいました。
午前十一時、二階で休んでいた私の耳にB29の爆音が聞こえたので、防空壕へ避難するため急いで階段を二段ほど下りた時、稲妻のような閃光が走り、つづいてドーンと頭の上に重いものがのしかかり、残りの階段を押し落とされてしまいました。その重いものは、壁が抜きとられたもので、私はその下敷きになったのです。幸い親指のつき指程度ですみましたが、瞬間私は大量の焼夷弾が落ちたかと思い、早く消さなければとあせりました。この頃、アメリカ軍は夜になると日本の各都市に焼夷弾を落とし焼野原にする作戦だったのです。
壁の下からやっと這い出て外を見ようと入口を出ると、強い熱風を正面から受けて後へ倒れました。気がついたら家の中はメチャメチャ、屋根は何か所も穴があき、畳は持ち上がって重なったり、建具もやられていました。私がいた部屋もガラスが割れ、奥の壁につきささっていました。一足遅かったら私の体にささっていたのです。いま想像するだけでもぞっとします。母と妹が、家の向かいにある田んぼの草取りに行っていたので心配でたまらず、庭に出てみました。すると向うにある山が今にも根こそぎはがれるのではないかと思うほど波うってゆれてい

ました。これが爆風だったのでしょう。母達三人が手を振っていたので、ああ助かったなと思い安心しました。三人とも田植してある中に伏せたそうです。防空壕も裏にありましたが、そこまで行く余裕がなかったのです。

町の方を見ると、空はどんより赤く灰色に見えてクラゲのような形をした雲がぽっかり浮かんでいました。これが「原子雲」でした。母達に早く帰るように庭先で大声で叫びました。家族全部そろって、何事が起きたのだろうかと話しているうちに、姉が「これが三日前に広島に落ちた『空中爆弾』だよ」と言うのです。田んぼの方から見ると、農家のわらぶきの屋根は全部燃えていました。その雲を見ながら、「あそこに落ちたのが、ここまでこんなにひどいのだろうか」と言って、おそろしさにおびえながら庭先で話しているうちに、油のような雨が降ってきたのです。又防空壕に入りましたが、しかしこの雨が体に害になるとも知らず、他の人達はどうしているかと気になって見に行きました。すると下のお婆さんが口もきけず、足も腰も立たずに泣いて手まねきするので、私も子どもながら一生懸命で引っぱって壕に連れてきました。お婆さんは腰が抜けていたのです。どこの家もひどく壊されてしまいました。でも、「みんな無事で良かったね」と泣いて抱き合いました。

しばらくすると怪我や火傷をした人達が裸で逃げてきました。途中で亡くなった人もいるのです。衣類は焼けてボロボロです。妹の友達も私の家に来ましたが、裸同然。一晩泊めて服を着せて帰しました。服は取りかえても、「原爆のにおい」というのでしょうか、こげくさくてそばにいられないほどの悪臭でした。

一週間ほどしてから爆心地辺りに行ってみました。私が通っていた女学校も、妹の学校も跡形もなく焼け、報国隊に行っていた工場は、鉄の骨組みだけがアメのように曲がりくねって残っていました。浦上天主堂もこわされ、屋根の丸い大きなコンクリート造りが横の川に吹き飛ばされて、見る人ごとに驚いていました。焼けこげた馬の死体が悪臭を放ち、そばを通る時は目をそむけました。行方のわからない

家族を探す人達がたくさんおり、そんな中で身元のわからない死体をまとめて広場で焼いているのをあちこちで見かけました。ほんとうに平常のときにできることではございません。それからデマがひどくアメリカ兵が上陸するから女・子どもは避難するように連絡があり、二山まで逃げました。山の平らな場所にカヤをつり、ゴザを敷いて休みました。この夜は一晩中町から逃げて来る人達が絶えなかったのです。

こうしているうちに終戦となり、幸いにも今日までなんとか無事でおられるのを幸せに思っています。が、ときおり届く長崎からの便りに、だれだれが亡くなったというのがあり、私と同じ被爆者で、その病気がほとんどガンなのです。私も健康に自信がなく、とても不安になります。あの地獄のような惨状と恐怖はどう表現したらよいか、十分の一にも達しなかったと思います。二度とこの世に生を受けることはできませんので、今ある命を大切にして世界中の人たちが平和で暮らせる世の中にしてほしいと願う心でいっぱいでございます。

（第三回江戸川原爆犠牲者追悼式にて'83・7・24）

「追悼碑の会」の名前について

岡田弘隆

追悼碑を訪れる人は、この追悼碑を作った会がいくつもあるのかな、と思われるかもしれません。そこで、会の名前についてひとこと。

「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」は、もとからこの名前であったわけではありません。一九八一年七月にこの追悼碑ができるまでは、「江戸川区に原爆犠牲者追悼碑を建立する会」という名前でした。ですから、追悼碑のいわれを書き込んだ「建立のことば」の碑文や、碑のうらがわには、この「建立する会」の名前がほりつけてあります。追悼碑ができあがってから、現在の名前にかわりました。ですから、八二年七月に広島・長崎両市からの寄贈により、「原爆瓦の碑」がくわわり、また八三年七月には、「平和の鐘」が追悼碑のすぐわきに完成しましたが、これらの台座の石には現在の名前、「江戸川原爆犠牲者追悼碑の会」とほりつけてあるというわけです。

苦しみ生き続ける被爆者

梅沢　武次　（広島）

私は被爆者の中でもいたって身体が丈夫で自分でも自信がありました。ところがある日突然に目が見えなくなり、だんだんと視力が落ちてきました。右の目に雲みたいな点ができました。二、三日したら直るだろうと思い、あまり気にしないで働いておりました。十日たち数十日たちましたが、目は前の視力にもどることはありませんでした。日増しに視力が衰えていく自分の目はいつ見えなくなるのであろうかと思い続けるようになりました。医者に診察を受ければ、手術しなければだめだ、入院しなければだめだ、…なんと言われるか心配でしかたありません。目が見えなくなったらすぐ自殺したほうがよいとまで思うようになり、眠れない夜が続きました。悲観的になり、自分はだめだ、自分はだめだと思い続けました。

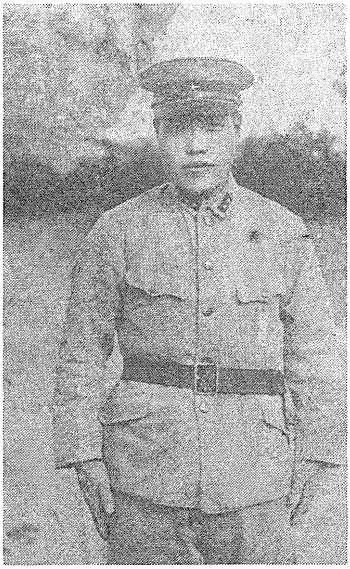
勇気を出して医者に見てもらうようにと妻に言われ、しかたなく病院に行きました。診察の結果、神経性網膜炎と診断され、このままにしていると見えなくなる、至急入院して治療を受けるようにと言われ、入院しました。物を眺めてもみんな曲がってみえる。ベッドで鏡を見ながら、自分の目はどうなるのだろうかと思うと、ふとんの中で涙が出てくる。淋しさが胸の中いっぱいにこみ上げてくる。妻は今頃私の入院のために一生懸命にミシンをふみながら働き続けているだろう。その姿を思い浮かべながら涙はとめどなく出てくる。ごめんね、私がこんな眼病にかかり、仕事もできなくなって。情ない。早く直して退院しなければ。でもまた気弱い気持ちが私をおそってくる。おれはだめだ。元の身体にはなれない。病院で朝起きるのもいやだ。人と話をするのにも嫌気がさしてきた。自分一人きりでいたい。

病院の屋上に上がり、下を見ながら考えたこともありました。飛び下りて死んでしまった方が楽になるなあ、でも妻があんなに心配してくれているし、私が死んだら妻はどうなるのであろうか、そう思いながら病室にもどったことが何回とありました。現実に苦しみ生き続ける被爆者は私だけではない。全

国には三十八万人の被爆者がいるのだ。高齢になられた方々が多い。病気の方も年々多くなる現実だと自分に言いきかせたこともありました。でも精神的な苦痛は日増しに私をおそってきました。結局手術をしないまま二十六日間の病院生活を送り、昭和五十一年十二月、退院し、家から通院するようになりました。目は入院前とそんなに変わらず、ただいくらか良く見えるようになったかなという程度でした。毎日江戸川区平井から代々木病院に行き、約一年間治療を続けました。

少しずつ目は良くなりはじめてきましたが、今度はノイローゼ、そううつ病が私をおそってきました。病院に行き先生に診察を受けるのがいや。電車に乗って人々に見られるのがいや。おれをみんなが見ているような気がしたから、電車の片隅に小さくなっていました。三十分位の時間でしたが非常に長く感じました。また病院で治療を待つ時間も非常に長く思えてなりません。早く家に帰りたいと思うようになり、家に帰りつくとホッとする毎日でした。

被爆者団体の役員であった私は、役員の会合の知らせがきても三年間も出ないで家にとじこもっていました。妻には「あなたは役員会にも出られないような人間だから今に人に嫌われ相手にされなくなりますよ。」と時おり言われました。そしてまた悲観的になるのです。知人、兄弟、みんなみんな会いたくない、話もしたくない、仕事もしたくない、生きていくのもいやだと思っていました。親江会の役員の方から電話がきても出るのがいやで、それに何を話してよいかわからない。頭がボーっとして、声もかれ、出なくなってきた。あまり声を出さないから自然に出なくなる。みんなだめ人間になってきた。



当時の梅沢武次さん

工場に仕事に行っても働くのがつらくなってきました。四十数年間私と共に働いてきた機械を使うのがいやになりました。製品の段取りも上手にできなくなってきた。バイトをグラインダーでとぐのでも手がいうことをきかなくなった。工場の主人と話をするのもいやになった。通勤の時も人目をさけるようになり、自転車で工場まで行くのでも精神的に疲れるようになった。仕事が終り、帰宅して家の中に入ると安心感でほっとする。ふとんの中に入り寝ている時が自分では一番安心できる時間だ。朝、明るくなるのが一番いやだ。考えれば考えるほどつらくなる。死にたいと思う日が多くなる。こんな状態が数か月間続きました。早く良くなって人並みになり外へも出られるようになり、近所の人とも楽な気持ちで話をしたいなあと思いました。しかし、人間生活に疲れ果てた自分をどうすることもできません。情ない人生をいつまでも続けていくのがますます苦痛でたまらないのです。

ある日、しばらく振りで親江会事務局長の臼井さん（故人）から、私の留守中に電話がありました。臼井さんは私の病気を心配され、一日も早く元気になり、会の方にも出てくるようにと励ましてくださったそうです。その時はたまらなくうれしくなりました。臼井さんの息子さんも長い闘病生活で奥さんも疲れておられるとのことです。私と妻と西岡さんと三人で臼井さん宅に行き、互いに励まし合った時点で、私も少しずつ元気をとり戻してきました。被爆者の同志であり共に運動を続けてきた友人からの励ましのためだったと思います。それから二か月間で元の元気な私に戻ったのでした。

老齢化した被爆者同志がお互いに励まし合う時代が現実にきているのです。孤独に生きる人たちが増えていることを思うと、一日も早く被爆者援護法を作ってくださるよう国にお願いし、安心して生活ができるようにしたいと思います。そのためにも日本被団協を支え、運動にも参加されるよう、広島、長崎で被爆された同志のみなさんにお願いいたします。私も世界平和のための運動にひきつづき参加をいたしていきます。

平和の灯とならん
ー亡夫相川弘のことー

相川絹子

亡夫相川弘は、爆心地から一・三キロメートルの地点で広島の原爆を受けました。当時、私ども家族は広島から二里あまりはなれた安佐郡河内村に疎開しており、夫は毎日そこから広島へ通勤していましたが、たまたま八月五日の夜は広島の親戚に宿泊、六日の早朝、会社に出勤したところで災害をこうむりました。

六日の夕方、夫は血だらけになって帰ってきました。やっと辿りついたというところでそのまま動けなくなりました。頭、喉元に無数のガラスの破片がささり、特に喉元の十八個の厚ガラス摘出が大変な手術でした。数日後、顔は大きくはれ上り、とても助かるとは思えませんでした。親戚の者も集まり、おくやみを言われたり火葬のための蒔の用意までするという状態でした。そのような死線をさまよって生きのびることができたのは不思議なようです。

被爆から終戦を迎え、戦後の混乱した時期、五人の幼な子を抱えた苦しい生活が始まりました。第二の人生と申せましょうか。本当に心が休まることのない幸せ薄いものであったかと思います。

そのような中で、幸運にも、原水爆反対運動、被爆者の救援活動などのお仕事に皆様とともに参加させていただきました御縁は、人生に残されたただ一つの喜びとするところではなかったかと陰ながら思うところでございました。亡夫も最後の務めと喜び又生き甲斐にもして、老体に鞭打ち、後には病軀と闘いながら、がんばり続けておりました。

数年前、腹痛で入院、手術で人工肛門にするという不自由な体になったのですが、これを他人様に気付かれる事のないように心がけて、集会その他への参加にも気を配っ

故相川弘さん

ておりました。その手術の際、医者より私ども家族には直腸がんである事も知らされていましたが、一日でも長く生きてくれることを願いながら看病してきました。しかし、昨年一月から寝込むようになり、本年一月二十四日、遂にかえらぬ人になりました。

十数年間という長い年月、役員や多数の皆様の御支援で江戸川被爆者の会の会長を勤めさせていただいた事を、心より御礼申し上げたいと思います。

生前、夫はよく米ソの対立等国際情勢の悪化に心を痛め、被爆者の運動が世界の平和に寄与する役割の大きいことをつねに申しておりました。平和を愛するすべての人々が力を合わせ、再びヒバクシャをつくることのないように、核廃絶、真の平和が実現されるよう心から願ってやみません。この東海寺の原爆犠牲者慰霊碑の中に眠る多くの方々とともに、夫は生きていたときと同じように、『原爆許すまじ』の平和の灯となっていくことと思います。

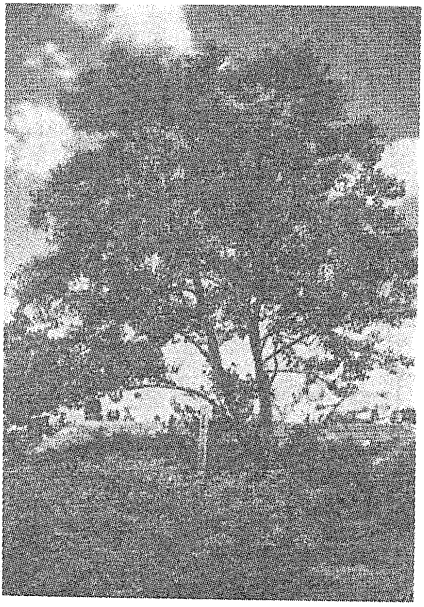
今日ここに、東海寺の碑の中に納めていただけることを心から感謝いたします。

最後に、つたない歌ですが、私の心情をうたいました。恥ずかしいですがおききください。

うつし世にまた生まれこなば胸あつく
夫とふたたびの　縁をぞねがう

ありがとうございました。

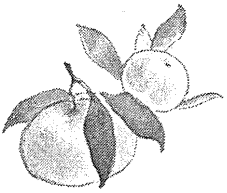
（東友会の慰霊祭にて遺族代表として'83・8・31）



長崎平和公園の親江会記念樹なんきんはぜ。'75年植樹。

臼井さん父子の生き方

銀林　美恵子



江戸川原爆被害者の会、親江会の事務局長であった臼井武雄さんが急逝されたのは、昨年一九八三年七月三十一日のことでした。ひき続きその一ヶ月後の九月一日、臼井さんの御子息である被爆二世の光雄君が十年の闘病生活の末、二十五才の若さで父上の後を追うようにこの世を去られました。この相つぐ不幸は親江会の者にとって深い悲しみであり、大きな痛手でもありました。この文集に臼井さんの被爆体験を掲載の予定で、御本人も承知しておられたのに、それができなかったのは返す返す残念です。亡くなられた後で奥様からお聞きした事や以前臼井さんが折りにふれて話された内容をもとにこれをまとめることにしました。

臼井さんは茨城県生まれの関東育ち、大平洋戦争の末期、軍隊に召集され、南方戦線に移送される途中、艦が沈没して、二昼夜海上を漂流するというおそろしい体験をされました。木片につかまって浮かんでいるわけですが、力つきて手をはなし、そのまま海の中にのみ込まれて消えていった人達も大勢います。ふかに喰われるのではないかとひやひや、生きた心地がしなかったと、これは随分前に臼井さんが話してくれたことです。やっと通りかかった船に助け上げられ安心した途端に息をひきとる人もいた中で、彼は生きのびることができました。肛門のあたりはふやけて感覚もなくなり、たれ流しという状態で広島に上陸、江波の陸軍病院に収容され治療を受けることができました。それがようやく回復しかけた頃、今度は、八月六日の原爆にみまわれることになります。

爆心地から三キロぐらいの所で、建物の中にいて臼井さんはやけどや怪我からはのがれましたが、つぎつぎに運ばれてくる被災者の世話や手当等の救援活動にくわわりました。「ひどかったよ。やけどでただれたところへはえがたかって、うじがわき…」

とよく奥様に話されたそうです。少し後のことでしょうが、「台風のとき水の中をばしゃばしゃと歩いたら、骨の上をふみつけていたんだよ。悲惨だった……」とも言われたそうです。

敗戦後、東京に帰って、もと働いていた金属研磨の仕事にもどり、十年ぐらいして独立、事業も順調にすすみ、夫人と光雄君の親子三人で幸せな家庭を築いておられました。親江会発足の頃から、御家族の協力を得て会の事務局を引き受け、江戸川の被爆者運動を支えてこられました。

光雄君は病気一つしない明るく元気な少年で、彼が私立錦城高校に入学した時の御両親の喜びは大変なもので、まさに臼井家は絶頂でした。しかし、高校に通学できたのはわずか一学期のみ、その年の夏運動の合宿の頃から健康にかげりがみえてきました。歩くと足がもつれてたおれたりすると心配しているうちに、歩けなくなり、家の中を這うようになってきました。最初の病院で筋委縮症との診断を受け、難病にとりつかれた不幸を嘆きながら、筋肉隆々の大きな息子を背負って、臼井夫妻はあちこちの病院をまわりました。少しでも良くなるようにと、色々な人に相談し、接骨医や指圧にも通い続けましたが、歩けるようにはなりません。

故臼井武雄さん

足が駄目になった光雄君は、アマチュア無線の勉強をして、耳から外の世界との接触を保ち、病床でも楽しそうにふるまっていました。ところが次は耳が聞こえなくなるのです。病名も『多発生神経性腫瘍』（レックリング・ハウゼン氏病）というむずかしいもので、神経のあちこちに腫瘍ができ、それをとり除いてもその器官がこわれてしまうという厄介な病気です。脳や胃・腸の手術もしました。耳は聞こえず、声を出すのも手を動かすのも不自由、全く歩けない、それでも車椅子でサッキづくりに精を出していた光雄君の意欲はすばらしいものでした。

ちょうど亡くなる一年前の夏、訪問した私に気をつかい、冷蔵庫の側まで車椅子を動かして、カルピ

スをごちそうするようにとお母さんをうながすような気のきく優しい青年でした。だから父上の健康の異常にも早くに気付き、顔色が良くないから病院に行くようずいぶんすすめていたそうです。しかし臼井さんの方は自分の病気は喘息のみと思い込み、「なれるものなら自分がこの子の代わりになってやりたい」と光雄君の心配ばかりしておられました。

故 光雄君

臼井さんがたおれたとき、骨折で入院ということだったのですが、骨がもろくなっていて手のほどこしょうのない『ガン』の末期症状で、わずか二週間の命でした。そんなに悪いとはつゆしらず、私は次の機会に録音テープを持って臼井さんの被爆体験を聞きにくると約束しながら、それを果たせませんでした。後でうかがったことですが『銀林さんが来ると言ってたけどいつかなあ。間に合わなくなるが』とつぶやかれたとのこと。なぜもっと早く行かなかったかと、本当に取り返しのつかないことになったと申しわけなく思っています。

十年間、病いと闘いながら、つぎつぎと生き甲斐をもとめて生命の限りがんばり通し、最後は、体中動かなくなって、目だけで、父上をみおくった光雄君の気持と、その苦しかった後半生を想うとき、胸がしめつけられます。光雄君の病気と原爆の因果関係はわかりません。しかし、臼井さんはずっと、自分の被爆のせいではないかと悩み苦しみ続けてこられました。優しいお父さんであった臼井さんが、その光雄君を残して先立たれるときの気がかりと無念さはどんなであったでしょう。なぜ、臼井親子がこんな目に合わねばならないんだと、はげしい憤りを感ぜずにはおられません。

言葉に尽せない苦痛を背負いながら、被爆者運動に誠心誠意つくしてこられた臼井さんに、その証言を臼井さんの声と言葉でのこすことのできなかったおわびをこめて、この文をつづりました。

お二人の御冥福をお祈りします。

水をいっぱい碑にかけて

被爆二世　提　英樹
（松江五中二年）

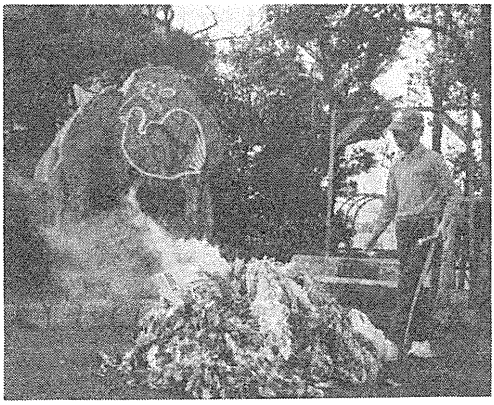
三十九年前、広島、続いて長崎に原子爆弾が落とされ、三十数万人の命がうばわれたこと、いつも父母に聞かされています。

父母も長崎で九歳の時に被爆したそうです。父の姉は爆心地に近い浦上駅で勤務中に被爆死したそうです。皮膚が焼けただれ、祖母に、「水が飲みたい。水が飲みたい。」と涙を流して言っていたので、水を腹一杯飲ませたら、満足そうにして亡くなったそうです。

原爆に関する映画や本をよく見ています。とくに「はだしのゲン」のアニメ映画が印象的でした。皮膚がたれ下がったり、目が飛び出たりしたのを見て、これが原爆のおそろしさだと思いました。

人間が人間を殺し合っている戦争が現在も他の国で行われているのをニュースでよく見ます。この戦争がいつ再びこの日本で始まるかわかりません。平和な世界にするには、やはり世界全国が仲良く協力し合えなければ、きっと平和にはならないでしょう。ぼくも戦争はいやです。戦争という言葉がなくなってほしいと思います。ぼくも大人になったら父母と同じように戦争がなくなるまで訴え続けていきたいです。

滝野公園には追悼碑が建てられています。休日には父といっしょに掃除をしに行きます。冬はとくに水をとりかえたりするのがたいへんですが、父の姉や犠牲者の方がこの碑におさめられていることを思うと、やらないではい



千羽鶴を心をこめて焼く英樹君

られない気がします。「水がほしい…」と言って亡くなった人々のために、碑に水をいっぱいかけてあげます。

三十九年たった今でも、広島、長崎の原爆病院には大ぜいの被爆者が入院しているそうです。原爆病はとてもこわい病気です。戦争が終わっていても、被爆者にとってはまだ終わっていません。戦っています。このようなことが二度と繰り返されぬように世界が平和になってほしいものです。

真剣に平和を訴えつづけている親江会の高木さんはすばらしい人だと思います。ぼくも将来は高木さんのようにがんばりたいと思っております。

16ミリ映画リスト　※無料で貸出します。

①にんげんをかえせ（カラー19分）原爆記録映画、10フィート運動第一作、監督＝橘祐典
②予言（カラー42分）同第二作　監督＝羽仁進
③歴史―核狂乱の時代―（1時間55分）同第二作、監督脚本＝羽仁進
④トビウオのぼうやはびょうきです（カラー19分）原作＝いぬいとみこ　監督＝宮崎一哉・板谷紀之
⑤おこりじぞう（カラー人形アニメ27分）原作＝山口勇子　監督＝河野秋和
⑥子どもたちの昭和史第一部「大東亜戦争」（53分）第二部「15年戦争と教師たち」（40分）都教組作
⑦核・トマホーク／悪魔のミサイル（カラー23分）制作協力＝翼プロ、日本原水協　演出＝板谷紀之
⑧もし、この地球を愛するなら（カラー26分）提供カナダ国立映画制作庁　制作演出＝片桐直樹

その他、明日への伝言（カラー7分）ピカドン（カラーアニメ9分）など。平和スライドも数点あり。

――六五一―三一五三　江教組・丸　宗市――

戦争をするのも、原爆を作ったのも人間

五葛西小・児童会会長　加藤貴郎

もううんざりだ。ぼくの父は、原爆を生で味わった人です。父は、ぼくにも何回もくわしく話してくれました。広島、長崎の原爆資料館なども父に見せてもらいました。又、学校でも「はだしのゲン」「人間を返せ」そして今年は「おこりじぞう」と戦争に関係のある映画を見てきました。先生には、「東京大空襲」「おかあさんの木」などいろいろな本を読みきかせてもらいました。

ぼくは、戦争について知れば知るほど、戦争がどんなに残酷なことかわかってきました。戦争は、おこりじぞうのひろちゃんのように、戦争に全く関係のない人をまき込んでいきます。許せません。でも、戦争をするのも人間、原爆を作ったのも人間です。

ぼくたちの学校の児童会では、今年、「暴力、言葉の暴力をなくす」とりくみをしています。友人を大切にする心をもって、戦争なんかに反対できる大人になりたいと思います。そうすればおこりじぞうも元のように笑った顔になるかもしれません。がんばります。

（第三回江戸川原爆犠牲者追悼式にて　'83・7・24）

平和教育と追悼碑

市川宏義

三年前、追悼碑ができて以来、第五葛西小学校の児童会は、毎年全国児童約千百名が折った千羽鶴を献納してきました。この千羽鶴は、三年前から全校でとりくんでいる平和教育の一環として作られたものです。

五葛西小では、三月十日東京大空襲の前後、七月、十二月と年三回の特別授業と、それに映画会や平和展などを行い、子どもたちに命と平和の尊さを伝える努力をしてきました。

昨年も「おこりじぞう」の映画を上映し、事前指導として絵本の読みきかせもしました。映画を見たあと、「笑いじぞうがなぜ怒った顔になったのか」を話し合ったり、感想文を発表し合ったりしました。

その後、児童会では一年生から六年生まで全員で平和の願いをこめて一人一羽ずつ鶴を折ることを提案し、朝自習の時間を使い文字通りの千羽鶴をつく

り上げました。六年生は、一年生に手取り足取り教えてあげ、七月の短い期間でしたが立派な千羽鶴を独力で完成させたのです。

この鶴を、追悼式の当日、児童会役員全員の手により献納し、会長の加藤君が代表して発言しました。私たちは彼の決意を大切にし、戦争に本当に反対できる子どもたちを育てることが、いま教師に課せられた大切な仕事の一つであると信じています。

これからも、この葛西の地から、加藤君のようにしっかりした子どもたちをたくさん生み出していければと思います。

（現・船堀第二小学校）

高校生の誓い

都立江戸川高校
平和研究同好会　谷地田　道　子

私は都立江戸川高校の二年生です。ちょうど二年ほど前、テレビの前でこの江戸川原爆犠牲者追悼碑の除幕式を見ていました。今日第三回追悼式をむかえるにあたって新たな決意をし、参加させていただきます。乱暴な発言になりますがお聞きください。

私が平和問題に関心を持ち始めたのは母校上平井中学校においてでした。みなさん御存知かもしれませんが、上平井中学は八年前より広島に修学旅行を定め、入学と同時に平和問題にとりくんでいます。上級生からの修学旅行報告を聞き、数々の戦争体験者の文集を読みました。また、映画を見たり、遠足で丸木美術館に行ったりしています。でも最初私は、「戦争は悲惨である。かわいそうである。起こしたくない」と思いつつも、「なぜ修学旅行で広島に行かなければいけないんだ！　行きたくない！」という気持ちが強くありました。

それが、どうしても広島に行きたいと思い始めたのは、「はだしのゲン」を読んでからでした。戦争の話と聞くと「めんどくさいな」と思っていたころ、マンガということからなにげなしに読んだのです。マンガとも言えない悲惨な絵に目をおさえ、ゲンの生き方に感激しました。そして「戦争はいけない。やっちゃいけないんだ」と夢中になって感想文を原稿用紙十枚につづったのを覚えています。

これを境に平和関係のことがらにも素直に、むしろ積極的にとりくむようになりました。修学旅行実行委員と

なり、あらゆる面から事前学習をつづけていきました。そしてその気持ちも頂点に達したころ、いよいよ自分の目、自分の耳、そして自分の肌で感じるために修学旅行に行きました。

この旅行は広島一泊京都一泊で、実際広島にいられるのは約一日。短時間でしたが、個人個人それなりに胸に残るものがありました。私の場合、原爆養護ホームへ行った時のことが一番印象的でした。私は養護ホーム訪問の責任者兼司会者だったので、その日は緊張してしまい、その上、進行に使う紙を忘れてほんとに大変でした。そんな中で養護ホームのおじいさん、おばあさんに出会い、一生忘れることのできないあの八月六日を知りました。「思い出したくないんです。」とただポツリと言ったおばあちゃん。涙を流しながら話してくれたおじいちゃん。そのときの顔、決して忘れることはないです。

私たちが養護ホームより帰らねばならないとき、杖をつき、耳に補聴器をつけ、じいっと私たちをみているおばあちゃんがいました。おばあちゃんは私を拝むみたいにして、涙をいっぱいためて、「ありがとう。ありがとう。」って何回も言うのです。このとき、「きっと来年も広島にくる」と心に決めました。

そして去年、再び広島に行きました。中学の先生二名、同期の卒業生二名と私の合わせて五名。広島ではむこうの中学の先生のお宅に泊めていただき、修学旅行とは違ったかたちで自分の足で歩いて広島を知ろうとしました。8・6の合同慰霊式参加、原爆小頭症の畠中百合子さん訪問。そして似ノ島にも行ってきました。その他いろいろな方にお話を聞き、自分の内(なか)の決意をかためました。あの養護ホームで出会ったおばあちゃんとは今も文通を続けています。

そして広島より帰った九月、江戸川高校文化祭に、戦争をみんなに知ってもらうことをテーマに有志として参加しました。この時の人数は七、八人で、実際とりくむのが一週間ほど前になってしまったので、展示にしろ、映画にしろ、借り物の文化祭になってしまいました。当日も会場に足をふみ入れてくれた人はわずかで、ほんとうに悲しい結果でした。もう来年はやめようと力なく思いました。でも今年も文化祭参加を決めました。それも今年は同好会として……。文通しているおばあちゃんの手紙を読んでいると、戦争の悲惨さをうったえずにはい

られないんです。自分一人でなく、友だちに呼びかけたら十三人の協力が得られたことに力を得て、今度は自分たちの文化祭をつくっていこうと思います。きっと成功させます。また、来年の三月には二年生全体で広島修学旅行に行きます。中学校の時とは違う面で見て考えてきたいと思います。

平和は、だれでもない自分のために、自身で守っていくものです。あの日、三十八年前の八月六日、八月九日のあやまちを二度とくり返さないために、私たち高校生、若者たちが必ず叫びつづけていきます。伝えていきます。そして二度と戦争が起こらぬよう平和を守っていくことを、今ここに誓います。なぜなら、それが私たちの義務そして権利だと思うからです。

（第三回江戸川原爆犠牲者追悼式にて　'83・7・24）

ＥＰ研と追悼式

菊地宏義

一九八二年の第二回追悼式に江戸川高校平和研究同好会が参加した。文化祭において反核平和問題を有志でとり上げたのは一年生であった。藤村恵子と顧問の私が参加した。率直に言えば、文化祭の取材のためであった。翌年、江戸高平和研究同好会（略してＥＰ研）は正式に承認され、そこに〝高校生の発言〟を求められたとき、前年の感動と反省から積極的にうけとめてくれた。

第三回には部長の谷地田道子が発言するだけでなく、全員で〝参加〟することになった。私はただただ彼らの無垢のエネルギーに感嘆していた。励まされたのは何も私だけではないだろう。若者たちの登場の場を用意してくれた人達に感謝している。「来年は他の生徒にも呼びかけ、皆で作った折鶴をもって参加できたらいい」「他の高校生にも呼びかけて……」等すぐにはできないかもしれないが、その芽は確実に育っていっている。

（現・都立新宿高校）

追悼式に参加して

東京空襲を記録する会　橋　本　代志子

七月の雨上がりの午後、私はかねてから御案内をいただいておりました原爆犠牲者追悼式に参加いたしました。式は江戸川の滝野公園の一角に建っている追悼碑の前で行われ、今年は碑の脇に新たに作られた〝平和の鐘〟の除幕式もあわせて行われました。

私には原爆につながる旅の思い出があります。五年ほど前になりましたが、私は「東京空襲を記録する会」のメンバー数人と共に、日本本土を灰にしたB29の基地、サイパン・テニアン・グワムの島々を見学にまいりました。御存知のように、あの三月十日の下町空襲の夜、B29三百三十四機は約二千トンの爆弾を積んでこの三つの島から出撃していきました。そして私の父母や妹もふくめた十万の都民の命をうばったのです。

その旅で今も目に鮮かに残っているのはテニアン島、ハゴイ基地の人類最初の原子爆弾を搭載した地点でした。七本の荒れ果てた滑走路の先のタガンタガンの茂るあたりにある二つの地点は少し離れて点在していましたが、同じように白い丸い石で囲んだ一坪程の土地の中に、白い花の咲くポルメリヤと椰子の木が一本、それに小さな金属の記念碑が一つ建っていました。碑の面は英文で、ここから原爆を積んだというだけの事務的な記録のみが刻まれていて、人間の心の痛みや平和の決意などは一言も記されてありませんでした。

めくるめく南洋の青い空の下、悪魔の爆弾を積んだB29は、ここから広島へ、長崎へ、向って発進して行ったのです。そのときのアメリカ兵は、あの強烈な閃光の下の地獄を、炎となった人間の海を、頭に浮かべることもなく、広い滑走路をすべり、海を越えて行ったのでしょう。私は計り知れない人間の罪深さを思い、胸苦しく、しばらくそこに立ちつくしていました。

広島に、三日後には長崎に原爆が落ち、それから一週間たち戦争は終わりました。けれども、二発の原爆は生き残った人々の上に残酷な後遺症の苦しみを負わせ、被爆者の戦争は終わりを告げていません。

あれから三十八年を経、再び許すまじと強く平和を願う私たちの原水爆禁止運動は、世界の中で大きな役割を

果たしてきたのですが、米ソ両国の核兵器開発競争はとめどもなくつづき、平和憲法と非核三原則の礎もゆらいできている今日このごろです。一方、SSDⅡの運動以来、いまだ一人一人の行動になって盛り上がってこない平和運動を思うと心があせります。

献花の人々の列にまじって〝平和の鐘〟のひびく中に白い夏菊を供え目を閉じると、昇華して鳩になった追悼碑の母子が、一瞬のうちに燃えた数十万の命のことを静かに語りかけてくれました。

（第三回江戸川原爆犠牲者追悼式にて'83・7・24）

「追悼碑」のおそうじ

岡田弘隆

追悼碑のおそうじは、いつもだれがしてくれているのでしょうか。

それは、高木さんという、江戸川原爆被害者の会（親江会）の会員の方です。高木さんは、ほとんど毎日のようにこの追悼碑をおそうじして、おまもりしてくださっています。「水を！水を！」と言ってなくなられた広島・長崎の犠牲者のために、追悼碑のまわりには水がはられております。この水をいつもきれいにたもっておくのはたいへんです。小さな子どもたちが水いたずらをすることもよくあるそうです。高木さんは、どろんこを流して、またきれいな水を追悼碑にかけ、回りにも水をたくわえます。

江戸川区は、この高木さんの熱意にこたえて、追悼碑のすぐわきに水道設備を作ってくれて、おそうじがしやすいようにしてくれました。また、おそうじの道具をしまっておく物置も近くに作ってくれました。

高木さんは核兵器をなくすための運動にも熱心に参加しておられます。なくなった被爆者のおもいを一身にせおって、高木さんは今日も追悼碑のおそうじをしておられるのです。

（泉福寺住職）

父の姿を通してみた親江会の活動

杉原　敬三

父、友之が死亡してから、もう五年目に入りました。被爆者援護、原水爆禁止運動に多くの足跡を残してきた親江会の活動の一端を、家庭から見た父の姿を通して、いくつか書いてみたいと思います。

父の遺影の前におまいりをすると、「原水爆禁止」のたすきをかけ、杖を持ってすわった姿が目に入ります。これは、昭和四十七、八年頃かと思いますが、広島の原水爆禁止世界大会へ行った時の写真です。「まず、被爆者は、自分の生活と被爆の証言によって核戦争を防ぐ運動を進めるのだ、というのが親江会の第一の仕事だ。」と言っていた父の姿をそのまま表わしているように思います。

毎年夏、父は広島市の慰霊祭、原水爆禁止の大会に参加していました。平和行進にも加わることがありました。昭和五十年には、平和公園内に記念植樹をしたとのことで、次の年の夏、父に案内され見に行きました。相生橋の一つ下流にかかる橋の西のたもとに、江戸川親江会の白い木標が立っており、小さなくすのきが一本植えてありました。今は相当大きくなっていることでしょう。

又、別のある年、七月上旬ごろかと思います。被爆者宅を訪問したいと言うので、私が車を運転し、自宅（西瑞江三丁目）から、下今井、葛西、雷、松島、篠崎、小岩と十数軒を回り、消息を訪ね歩きました。その頃は、事務局長の臼井さんが病気、事務局代行の西岡さんも健康を損ねておられたように記憶しています。回った方の中には、身寄りもなく、八十歳近くになって病気がちの方もおられ、原爆の残酷さを感じさせられました。

父は、若い時から農業をはじめとして港の荷役作業、荷車を引いての運送業、それに樵などで働いていたので、六十歳すぎてから腰が曲がっておりました。広島の田舎で、根曲がりの竹やつつじの木等を拾ってきて、杖にして持ち歩いていましたが、髪も白く、出かけると人目を引いたようです。被爆者援護法の制定などで陳情に出かけることもよくありました。「今日は郷里の〇〇代議士の

ところへ行ってきたら、下へもおかぬもてなしをしてくれた。」などと話していました。しかし、念願の被爆者援護法制定は政府の引きのばしにあい、又、国連総会への行動も具体的成果は不十分で、残念であっただろうと思います。

ともあれ、親江会に加入させていただいてから、毎日、新聞の政治、社会欄を丹念に読み、平和運動の一環に加わって働いたという誇りをもち、同郷の方々、被爆体験を共にした方々と支え合って、生きがいのある生活を送ったことは確かです。いろいろお世話になりました皆様方にあらためてお礼を申し上げます。

主な被爆者団体紹介

日本原水爆被害者団体協議会（被団協）
一九五六年結成
代表委員＝伊東　壮、山口仙二、伊藤サカエ
事務局長＝井上与志男
事務局　[redacted]
機関紙「被団協」

東京都原爆被害者団体協議会（東友会）
一九五八年結成
会長＝伊東　壮　事務局長＝田川時彦
事務局　[redacted]
機関紙　「東友」

江戸川区原爆被害者の会（親江会）
一九六五年結成
会長＝浄園満成　事務局長＝堤　久吉
事務局　[redacted]
機関紙「親江会だより」

昭和58年度 被爆者健康診断の概要（その1）

〈東京・足立・柳原病院〉

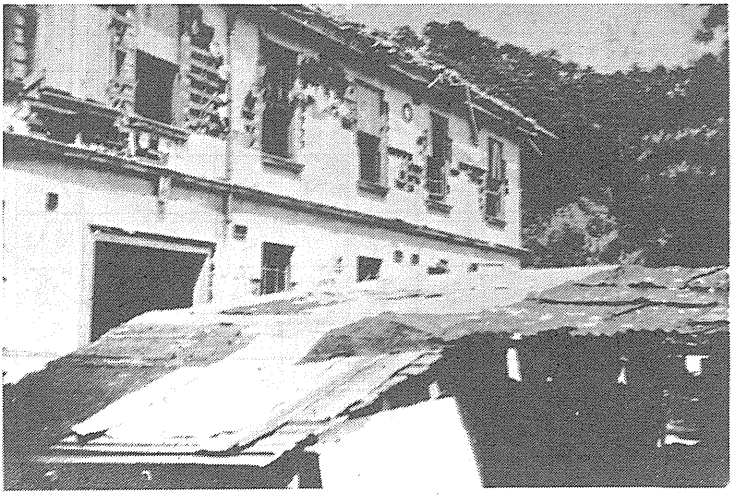
	結果項目 ＼ 健診月日	6/12	7/10	11/13	12/11	計（人）	健診結果の状況
1	異常ありません	15	26	4	11	56	ただし、機会を見て尿検査をしてください。高血圧について治療を受けてください。新小岩診療所でフォローをしてください。甲状腺機能低下症の治療の受診をしてください。胸のレントゲンをとっていません。その他。
2	もう一度検査をする必要があります	6	1	5	10	22	白血球減少症。糖尿の検査を（＋）。胸部レントゲンをとってください。その時に他の検査もしてください。（TTT、ZTT、CRP）心電図、高血圧、心筋障害など。
3	もっとくわしい検査をする必要があります	2	4	8	2	16	空腹時、尿糖をしてください。白血球減少症。心電図専門医に受診してください。その他。
4	時々検査や診察を受けてください	3	2	5	5	15	白血球増多症、高血圧。高脂血症。肝機能検査をしてください。高尿酸値。心電図。その他。
5	治療を受けてください	3	2	3	3	11	高血圧。貧血。肝障害。蛋白（＋＋）かかりつけで受診してください。その他。
6	ひきつづき治療をする必要があります	2	10	5	10	27	高血圧、肝硬変、糖尿病、高血圧と糖尿病、慢性肝炎、高血圧冠不全、肝障害、頸椎捻挫、ひきつづきフォローしてください。その他。
	計（人）	31	45	30	41	147	
	（男・女）	（15、16）	（27、18）	（20、10）	（21、20）	（83、64）	

区別受診者数　合計147人（男83人、女64人）

足立 73（47、26）　江戸川 49（26、23）　葛飾 12（3、9）
江東 4（2、2）　荒川 4（2、2）　板橋 1（0、1）
豊田 2（1、1）　台東 2（2、0）

昭和58年度被爆者健康診断の概要（その2）　〈東京・葛飾・健和会四ツ木診療所〉

		本人	2世	計	蛋白尿	糖尿病	心臓	高血圧	多血症	貧血	呼吸器	胃腸	血尿	高グロブリン血症	高脂血症	肝臓	バセドウ氏病
第一回 6月～7月実施	正常	15	6	21													
	再検査	9		9	5	1	1	1	1	1							
	要観察	7	1	8			3	3			1						
	要治療	7		7		2		5			1	1					
	計	38	7	45													
第二回 11月～12月実施	正常	11	3	14													
	再検査	4		4	1	1		1	1				1	1			
	要観察	10	1	11			4	3			3				1	1	
	要治療	10		10		2		7									1
	計	35	4	39													



▲広島市皆実町、船舶通信兵補充隊第二中隊の兵舎。二階建兵舎の屋根瓦は崩れ落ちている。側壁も崩れかかっている。比較的に建物が崩れていないのは、爆心地が兵舎に向かって左の方であったためであり、左隣の一中隊兵舎の方が崩れ方がひどく、梁の下敷きとなって死亡した者数名、火傷を負った者は相当数あった。手前のバラックのような建物は、雨露しのぎに急造した兵舎。本来の兵舎内は起居できない状態だった。左図の三、四中隊兵舎はほとんど倒壊した。中隊跡地は現在社会福祉会館(?)で、営庭の辺りが国道バイパス。

第四回江戸川原爆犠牲者追悼式次第

第一部　式典（区立滝野公園）

1. 開会あいさつ
2. 物故者名簿奉安
3. 黙禱・平和の鐘
4. 来賓あいさつ
5. 被爆者体験発表
6. 千羽鶴献納
   代表のことば・桐笛演奏
7. 献花・読経・お祈り
8. 合唱「原爆許すまじ」
9. 閉会

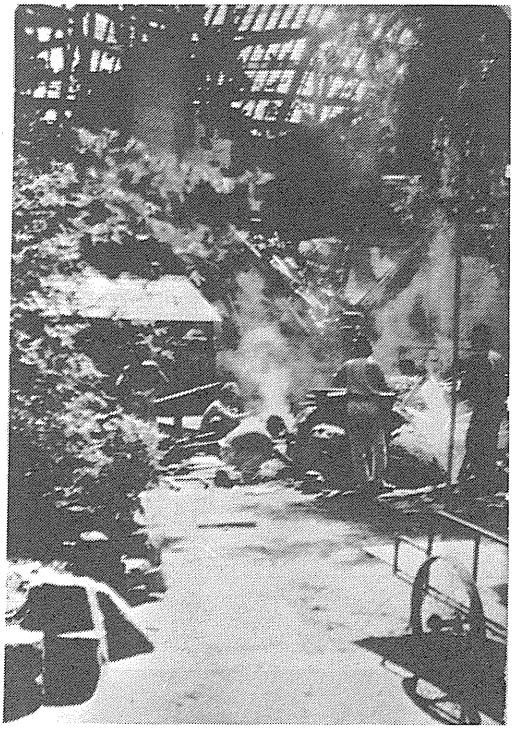
第二部　映画会（葛西区民館）
「トビウオのぼうやはびょうきです」「もし地球を愛するならば」

第三部　交流会

二枚の未公開写真

提供　本田孝夫

◀右の写真のバラック周辺で、「自活」（軍隊用語で、自炊のこと）をしているところである。田んぼに食用蛙をとりに行ったりした。



（撮影者不詳）

被爆者はいま

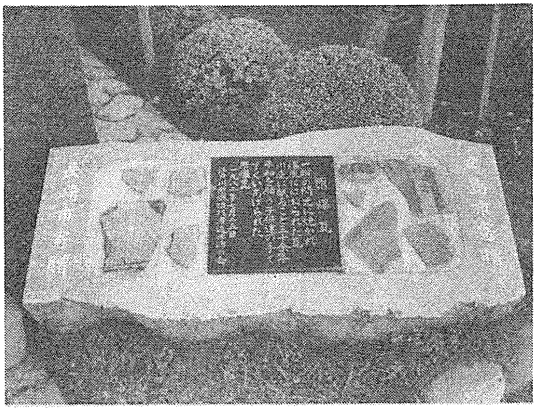
堤　久吉

広島・長崎の原爆から三十九年、被爆者は高齢化し、病気や生活の苦しみが深まり、不安な老後を迎えています。今も大きな心の傷を残し、自分だけでなく子供の健康まで常に不安を抱くほどの大きな被害です。私たちの願いである国家補償の援護法は未だに制定されず、それに諸手当受給へのしめつけや老人保健法による一部負担、医療内容の制限など現行の施策さえ切り下げられています。人類最初の核戦争の生き証人としての私たちの証言は、反核・平和運動の中で、ますます重要になってきています。（親江会事務局長）

原爆瓦

一九八二年七月第二回追悼式に際して、被爆地の高校生たちが平和への願いをこめて拾い集めた原爆瓦が、広島市と長崎市から寄贈されました。

江戸川区民の広範な協賛によって、原爆の恐ろしさをしるすこの原爆瓦が、碑の脇に永久展示されることになりました。



平和の鐘

一九八三年七月第三回追悼式に際して、大勢の区民の協賛により、碑の脇に平和の鐘が建立されました。その台座に設置したポストには、碑を訪れる方々のご感想を書いていただく連絡帳が備えてあり、平和を願う多くの方々のご意見が寄せられています。

（羽生　雅則）

執筆者紹介（被爆者関係）

氏名	被爆場所	爆心地から（キロ）	被爆当時の年齢・職業等	現在
浄園　満成	長崎市浦上	—	三一	元中学校長
田部　光子	広島市金矢町	一・五	三五	主婦
山内　登久子	広島市段原山崎町	二・六	二九	主婦
平山　丈夫	長崎市大橋町	〇・七	一八	自営業
林　浩	広島市郊外宮内村	—	●三菱兵器製作所	会社員
野村　綾子	広島市牛田町	二・〇	一五	主婦
深江　孝	長崎市萬屋町	一・八	●広島二中三年、翌日市内へ	自営業
高木　留男	広島市白鳥	一・八	二三	無職
伊藤　正吉	広島市宇品町	四・〇	●主婦	会社社長
宮田　吉朗	長崎市諏訪町	三・〇	一四	会社員
宮内　良雄	広島市「大本営」	一・〇	●鎮西中学二年	会社員
高橋　平吉郎	広島市中広町	一・四	二六	主婦
渡辺　和子	長崎市三川町	三・〇	●兵隊	自営業
梅沢　武次	広島市宇品町	四・〇	二五	故人
相川　弘	広島市西寺町	一・三	●船舶教導隊	故人
臼井　武雄	広島市江波	三・〇	一三	教員
銀林　美恵子	広島市千田町	一・八	●長崎中学一年	運送業経営
本田　孝夫	広島市皆実町	二・〇	二一	サービス業
堤　久吉	広島市外長与町	四・〇	●兵隊（安芸郡八本杉町在隊中）	
			三〇	
			●兵隊（中広国民学校仮隊舎）	
			一六	
			●無職	
			二四	
			●兵隊	
			四一	
			●会社員	
			二五	
			●兵隊	
			一七	
			●広島女高師一年	
			一八	
			●兵隊（船舶通信兵補充隊）	
			一〇	
			●洗切小学校四年	

〈あとがき〉

☆第一集の証言は約半数が「親江会だより」等に発表されたものでしたが、第二集のそれはほとんどがこの文集のために新たに筆をとられたものです。また、被爆二世の発言や被爆者健診資料なども寄せられ、内容的にも厚みをもったものとなりました。みなさんのご協力に感謝いたします。

☆証言を読むたびに新しい事実に出会い、きびしい追体験をするわけですが、とりわけ被爆者の方々の生き方に、それぞれのたたかいに、心を揺り動かされます。「その翌日」のことが未だ十分明らかにされないうちに、「その前日」が来てしまったかのような昨今、このささやかな証言集が少しでもお役に立つことを願っています。

（小林　功）

鳩になって
―江戸川・被爆者の証言第2集

一九八四年七月二二日発行
編集・発行　江戸川原爆犠牲者追悼碑の会
　代表＝浄園満成　西城正倫
編集委員　岡田弘隆　羽生雅則
　伊藤説翁　銀林美恵子
　本田孝夫　堤久吉　菊池宏義
　杉原博子　小畑精武　小林功
発行所　東京都江戸川区東小松川二の七の十七　泉福寺内
　追悼碑の会事務局
　電話（六五二）九四二八
印刷所　東京都江戸川区平井六の四二の一四　㈲三誠社
　電話（六一七）六一五七

江戸川原爆犠牲者追悼碑の会・編